収録①

【From Kobe fkobeR0410A.pdf 】
収録１．共生の大地へ 没後1年・内橋克人の歩いた道 神戸新聞特集記事より転記 2022.10.1.

神戸新聞NEXT　神戸新聞９月　特集内橋克人氏没後１年　特集　①～⑨より転記

経済評論家 内橋克人 主要作品リスト
（タイトルは単行本時、文庫化時に変更あり）

1960年代	外資のなかのニッポン
1970年代	恐るべき外資企業、優良店への挑戦、挑戦する幹部、伝説の日本人、危機こそ好機である、「安宅崩壊」以後、恐慌、匠の時代シリーズ（～1980年代）
1980年代	経営の匠、ニッポン地球時代、幻想の「技術一流国」ニッポン、社長辞典、日本エネルギー戦争の現場、考える一族 カシオ四兄弟、「重厚長大」の復権、原発への警鐘、ガンを告げる瞬間、「手法革命」の時代、ジャパン・システム激変の新図式、遅き隙の研究、KKニッポンを射る（共著）
1990年代	尊敬おく能わざる企業、「革新」已む能わざる企業、残り始めよ、破綻か再生か、共生の大地、内橋克人同時代への発言（全8巻）、「会社本位主義」をどう超える（共著）、日本会社原論（共編著）、規制緩和という悪夢（共編著）、大震災復興への警鐘（共著）、経済学は誰のためにあるのか（編著）、現代日本文化論－仕事の創造（共同編集）、規制緩和 何をもたらすか（共著）
2000年代	同時代の読み方、不安社会を生きる、浪費なき成長－新しい経済の起点、＜節度の経済学＞の時代、もうひとつの日本は可能だ、「共生経済」が始まる、悪夢のサイクル、共生経済が始まる、日本の原発、どこで間違えたのか、荒野渺茫、誰のための改革か（編著）、「人間復興」の経済を目指して（共著）、ラテンアメリカは警告する（共編）、城山三郎 命の旅（共編）、始まっている未来（共著）、大震災のなかで－私たちは何をすべきか（編著）、取り返しのつかないものを、取り返すために（共著）

共生の大地へ

筆一本 真っすぐに生きた

没後1年・内橋克人の歩いた道

❶ 荒野渺茫（びょうぼう）

穏和なまなざしで経済社会の本質を見続けた＝2007年、大阪市北区

今月だった。内橋克人さんが机に向かって執筆に打ち込んでいたのは。1933（昭和8）年、神戸市須磨区生まれ。12歳のとき神戸空襲をよろけ、神戸川長無言の足跡を経験、神戸高大（現兵庫県立大）卒業。新日鉄入り、経済誌記者となった。以来、NHKのドキュメンタリー番組、週刊誌などで鋭い切れ味の論評を重ねていた。最後のメッセージとなった2021年8月1日放送「関西発金曜日」。日本の針路を考えるこだ。

金曜日の番組で、政治論評を終えたのは3月の末。自身は病室で寝ているだったというが、次番組収録は無理に。8月1日午後4時43分、亡くなった。享年88。それから4年。番組さんが語った。「書くべきことは書いて、やるべきことはやった。本当に頭を下げて感謝したい。内橋さんからです。高橋さんは、ありがとうございました」

「最初の仕事は神戸新聞。いろいろ、その仕事いかなる能力にも恵まれなかった。いま思い出せるのは、ものすごくたくさんの人に会ったことだけだ。彼女の姿がとなったのが人の命が奪われた神戸空襲であり、その半世紀後の阪神・淡路大震災だった。

豊かのデスクトップパソコンの後ろ、正面に置いた全ての時計が止まっている。針が動いているのは大震災の時刻だけ。あの瞬間、時計が止まった。あの瞬間、「平常時」の社会の前提、「平常時」に強い疑問をもったまま、「被災者」となって人の目に触れることのない。戦争と農民の体験を「原点」とした信念的作品「荒野渺茫」（2013年）でうった。「いま、『暗い時代』への予感は的中し、『原発』は地に埋めたはずの『戦中・戦前』なるものが新たな装いをまとってよみがえり、荒い呼吸を開始しようとしている」（加藤正文）

12面に続く

共生の大地へ　没後１年・内橋克人の歩いた道

高い志を胸に厳しい峯（みね）を目指した生涯。神戸を起点に戦後社会の渺茫たる荒野を歩き、共生への希望を説き続けた一人のジャーナリストの軌跡を言葉と作品でつづる。（加藤正文）

2022.9.1.
～2022.9.23.

神戸新聞NEXT
https://www.kobe-np.co.jp/

ビジネスにも就活にも ひょうご経済プラス

共生の大地へ
没後１年
内橋克人の歩いた道

共生の大地へ　没後１年・内橋克人の歩いた道

９月１日で没後１年になる。戒名は「志峯院厳岳良克居士」。高い志を胸に厳しい峯（みね）を目指した生涯。神戸を起点に戦後社会の渺茫（びょうぼう）たる荒野を歩き、共生への希望を説き続けた一人のジャーナリストの軌跡を言葉と作品でつづる。

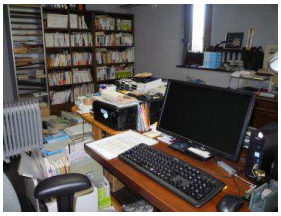
- （１）荒野渺茫（びょうぼう）　筆一本、真っすぐに生きた　2022/09/01
- （２）匠の時代　地域と響く「実の技術」　2022/09/02
- （３）規制緩和という悪夢　経済学の在り方を問う　2022/09/03
- （４）大震災復興への警鐘　欠けていた「都市政策」　2022/09/07
- （５）９０年代不況の帰結　働く者の尊厳見据えて　2022/09/09
- （６）原発への警鐘　「帰らざる河」渡った末に　2022/09/14
- （７）周縁の条理　もう一つの日本は可能だ　2022/09/16
- （８）「人間復興」の経済を目指して　「頂点同調主義」の危うさ　2022/09/21
- （９）民主主義をあきらめない　状況に強い危機感最期まで　2022/09/23

【参考】■【2021年10月 From Kobe】内橋克人さん逝去に想いをつのらせて 想いだすままに
常に現場に立ち、自分の眼で確かめ、権威におもねず、攻められる側に身を置く視点
「現場・人間主義」を貫いた巨星　　by Mutsu Nakanishi
添付「和鉄の道- from Kobe」に掲載紹介してきた 内橋克人氏の記事リスト
https://infokkkna.com/ironroad/2021htm/2021mutsu/fkobeR0310.pdf

共生の大地へ　没後1年・内橋克人の歩いた道

高い志を胸に厳しい峯（みね）を目指した生涯。神戸を起点に戦後社会の渺茫たる荒野を歩き、共生への希望を説き続けた一人のジャーナリストの軌跡を言葉と作品でつづる。（加藤正文）

2022.9.1.～2022.9.23.



経済評論家 内橋克人 主要作品リスト

（タイトルは単行本時。文庫化時に変更あり）

1960年代	外資のなかのニッポン
1970年代	恐るべき外資企業、優績店への挑戦、挑戦する幹部、伝説の日本人、危機こそ好機である、「安宅崩壊」以後、恐慌、匠の時代シリーズ（～1980年代）
1980年代	経営の匠、ニッポン地球時代、幻想の「技術一流国」ニッポン、社長辞典、日本エネルギー戦争の現場、考える一族 カシオ四兄弟、「重厚長大」の復権、原発への警鐘、ガンを告げる瞬間、「手法革命」の時代、ジャパン・システム激変の新図式、退き際の研究、KKニッポンを射る（共著）
1990年代	尊敬おく能わざる企業、「革新」已む能わざる企業、隗より始めよ、破綻か再生か、共生の大地、内橋克人同時代への発言（全8巻）、「会社本位主義」をどう超える（共著）、日本会社原論（共編著）、規制緩和という悪夢（共編著）、大震災復興への警鐘（共著）、経済学は誰のためにあるのか（編著）、現代日本文化論－仕事の創造（共同編集）、規制緩和 何をもたらすか（共著）
2000年代	同時代の読み方、不安社会を生きる、浪費なき成長－新しい経済の起点、＜節度の経済学＞の時代、もうひとつの日本は可能だ、「共生経済」が始まる、悪夢のサイクル、共生経済が始まる、日本の原発、どこで間違えたのか、荒野渺茫、誰のための改革か（編著）、「人間復興」の経済を目指して（共著）、ラテン・アメリカは警告する（共編）、城山三郎 命の旅（共編）、始まっている未来（共著）、大震災のなかで－私たちは何をすべきか（編著）、取り返しのつかないものを、取り返すために（共著）

柔和なまなざしで経済社会の本質を見続けた＝2007年、大阪市北区

筆一本 真っすぐに生きた

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道 ❶

荒野渺茫（ひょうぼう）

今しがたまで内橋克人さんが机に向かって執筆に打ち込んでいたかのようだ。神奈川県鎌倉市の自宅書斎。経験。神戸商科大（現兵庫県立大）膨大な書籍と資料が並ぶ。机上にはNHKのラジオ用原稿。蛍光ペンで線を引き、補足が書き込まれている。最後のメッセージとなった2021年8月1日放送「脱炭素社会 日本の針路を考える」だ。

急性心筋梗塞で救急搬送されたのは3日後の4日。自身は帰宅できるつもりだったというが、次第に容体は悪化し、9月1日午後4時37分、亡くなった。享年89。それから1年。妻泰子さん85は話した。「真っすぐに前を向いて走る人でしたね。本当に横目もふらない。真面目に真っすぐ行く人でした…」

1932（昭和7）年、神戸市須磨区生まれ。12歳のとき神戸空襲を を卒業した57年、神戸新聞に入り、年、筆一本で駆け抜けた。

「最初の7年間だけは神戸新聞にいたが、その後はいかなる組織にも属さずやってきた。いま何が始まっているのか、それが未来を明るくするいい芽なのか、逆にこれは危ないぞということなのか。この識別を他の人より相当早く、ある種のにおいで感じ取ることができるようになった」

国家や経済の大義が個人を脅かしてはならない。現場を歩きながら人間が主人公の「共生経済」を説き続けた。信念の原点となったのが大切な人の命が奪われた神戸空襲であり、その半世紀後の阪神・淡路大震災だった。

書斎のデスクトップパソコンの後ろに止まったままの掛け時計が横たえてある。針が指し示すのは大震災発生時刻の5時46分。あの瞬間、浮かび上がった社会の断面。「平常時には深い地底にもぐったまま、滅多なことで人の目に触れることのない真の『断層』の姿に違いない」

戦争と震災の体験を二重写しにした自伝的作品「荒野渺茫」（2013年）でつづった。「いま、『暗い時代』への予感は的中し、一度は地に埋めたはずの『戦中・戦前なるもの』が新たな装いを凝らしてむくむくと立ち上がり、荒い呼吸で四囲を封じ込める」（加藤正文）

12面に続く

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道 ❶

1面から続く

内橋克人さんなら、いま同時代にどんなメッセージを発しただろう。収束が見通せないパンデミック（世界的大流行）、迫りくる気候崩壊、ロシアのウクライナ侵攻で戦争も現実となった。国内では安倍晋三元首相の銃撃事件が起き、揺れる世情にあって目指すべき社会の姿はますます不透明になっている。

■危険な予兆

「時代状況としてとらえる目が必要」が持論だった。歴史の証言として「昭和恐慌」を意識していた。1978年の「ドキュメント恐慌」。失業、生活困難、自殺…。「追いつめられるごく普通の生活者の姿は、あの『昭和恐慌』の時代を彷彿とさせる」。社会不安の中、濱口雄幸、井上準之助、団琢磨らを襲ったテロとなり、戦争と軍国主義への道に至った。暗い時代の危険な予兆。「恐慌が高じて戦争に至る」と評論家の佐高信さん（77）との対談で語った。

終生、権力におもねず、市井の人々の目線で現状を分析し、警鐘を鳴らした。「市場と権力」「資本主義と闘った男」を書いたジャーナリスト佐々木実さん（56）は「経済ジャーナリスムでは経営者目線や当局目線になり、ビジネス情報の領域で処理されることが多い。社会的な視点に立って経済を語る人は極めて稀で内橋さんはその極めて稀な先達だった」。

時代を見抜く慧眼と洞察力。出世作となった「匠の時代」（78年～80年代）では人と技術の接点領域に光を当てた。一世を風靡したNHK番組「プロジェクトX」より20年以上前のアプローチだった。

■規制緩和万能論の虚妄

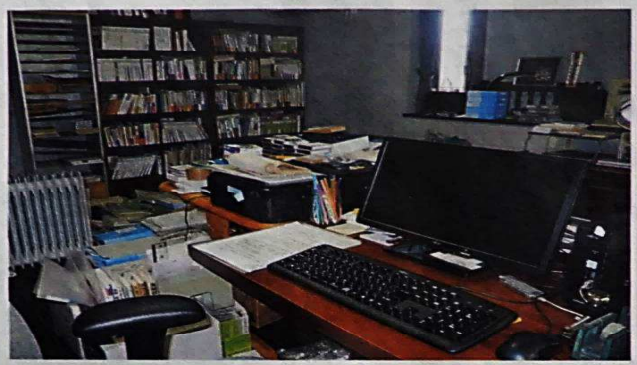
90年代、バブル経済が崩壊した後、規制緩和万能論が声高に叫ばれた。労働法制など各分野で市場原理を働かせればイノベーション（技術革新）が起き、安定した経済成長が実現できる。そうした言説に対し、95年の「規制緩和という悪夢」で米国航空業界の実情を調べ、安全性が損なわれるなどの問題点を告発した。「企業行動の規制を外していくのですから、市民社会としては抵抗の術がなくなる。こうしたリスクがあることを、われわれは肝に銘じるべきです」

「例外なき規制緩和」は何をもたらしたか。非正規雇用は働く人の4割近くになり、格差拡大を招いた。大規模店舗の相次ぐ進出で地域の商店街や市場ではシャッター通りが増え、疲弊の中にある。

現実の経済社会と切り結びながら、持論の「生きる・働く・暮らす」が地域で響き合う未来を見通していた。「尊敬おく能わざる企業」「共生の大地」「もうひとつの日本は可能だ」「始まっている未来」…。題名から内橋ロマンが立ち上ってくる。

■

9月1日で没後1年になる。戒名は「志峯院厳岳良克居士」。高い志を胸に厳しい峯を目指した生涯。神戸を起点に戦後社会の渺茫たる荒野を歩き、共生への希望を説き続けた一人のジャーナリストの軌跡を言葉と作品でつづる。（加藤正文）



内橋克人さんの書斎。たゆまぬ努力で取材と思索を重ね、膨大な著作を世に出した＝2022年7月31日、神奈川県鎌倉市

本質見抜いた洞察力

荒野渺茫（ひょうぼう）

「今日に明日をつなぐ人々の営みこそが経済の本質」。静かに語る内橋克人さん＝2003年、東京都千代田区

内橋 克人（うちはし・かつと、1933～2021年）神戸市生まれ。神戸商科大（現兵庫県立大）卒。神戸新聞経済部記者を経て独立。著書多数。神戸新聞客員論説委員も務めた。

経済評論家 内橋克人 主要作品リスト

（タイトルは単行本時。文庫化時に変更あり）

1960年代	外資のなかのニッポン
1970年代	恐るべき外資企業、優績店への挑戦、挑戦する幹部、伝説の日本人、危機こそ好機である、「安宅崩壊」以後、恐慌、匠の時代シリーズ（～1980年代）
1980年代	経営の匠、ニッポン地球時代、幻想の「技術一流国」ニッポン、社長辞典、日本エネルギー戦争の現場、考える一族 カシオ四兄弟、「重厚長大」の復権、原発への警鐘、ガンを告げる瞬間、「手法革命」の時代、ジャパン・システム激変の新図式、退き際の研究、KKニッポンを射る（共著）
1990年代	尊敬おく能わざる企業、「革新」已む能わざる企業、隗より始めよ、破綻か再生か、共生の大地、内橋克人同時代への発言（全8巻）、「会社本位主義」をどう超える（共著）、日本会社原論（共編著）、規制緩和という悪夢（共編著）、大震災復興への警鐘（共著）、経済学は誰のためにあるのか（編著）、現代日本文化論－仕事の創造（共同編集）、規制緩和 何をもたらすか（共著）
2000年代	同時代の読み方、不安社会を生きる、浪費なき成長－新しい経済の起点、＜節度の経済学＞の時代、もうひとつの日本は可能だ、「共生経済」が始まる、悪夢のサイクル、共生経済が始まる、日本の原発、どこで間違えたのか、荒野渺茫、誰のための改革か（編著）、「人間復興」の経済を目指して（共著）、ラテン・アメリカは警告する（共編）、城山三郎 命の旅（共編）、始まっている未来（共著）、大震災のなかで－私たちは何をすべきか（編著）、取り返しのつかないものを、取り返すために（共著）

神戸新聞2022.9.1.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道 ❷

匠の時代

「技術はちょうど地下の伏流水のように、いつか商品や時代の流れを変えてしまうことになるんだ」。若いエンジニアたちが議論を交わす（「電卓戦争の軌跡―シャープと力シオ」）。「お前たち、自分は旋盤工として採用されたんだ、と思え。現場を知らない技術者なんて、ウチでは不要なんだから」。現場に発想の原点がある（「セイコー・クオーツの世界」）。

■あふれるリアリティー

内橋克人さんの出世作となった「匠の時代」。1978（昭和53）年に夕刊フジで始まった連載は一躍脚光を浴びる。新しい原理を見いだし、手法革命に情熱を傾ける匠たちの群像。緻密な取材に基づく臨場感、豊富なエピソード、情感あふれる文章…。連載はシリーズ化され、後に12冊の文庫になるほどの生命力を持った。40年を経た今も瑞々しい。

当時、夕刊フジの経済担当部長だった島谷泰彦さん（8月に90歳で死去）は内橋さんや作家高杉良さん、評論家佐高信さんら後に大成する書き手を積極登用していく。中でも同い年の内橋さんを高く評価し、企画を任せる。「匠」という言葉になじみが薄かった時代だ。上り下りしたビルの階段、くぐった工場の門、歩いた生産現場、語り合った技術者たち…。取材は結果的に成功したが、悪戦苦闘だった。執筆者の内橋さんの疲労度は到底、私の及ぶところではなかった」。粘りに粘ってすくいあげた人間ドラマはリアリティーにあふれた。

取材に明け暮れていた頃の内橋克人さん。記者時代から現場取材を鉄則にしていた（提供）

■自賛論への警鐘

80年代初頭、バブル経済に向かう時期、日本企業の技術は米欧を超え、超一流だという「自賛論」が盛り上がっていく。戦後の「追いつき追い越せ」を合言葉に登った頂で得た「ジャパン・アズ・ナンバーワン」という賛辞に酔った。

危機感を抱いた内橋さんは「幻想の『技術一流国』ニッポン」（82年）を出す。日本企業の強みは生産現場で発揮される労働や技能の質に依存する傾向が強い。その現状に触れつつ、弱点として真の創造技術を育む風土の脆弱さを指摘した。教育、生産構造、研究体制…。「『アメリカを超えた』などと言わず、せめて高度のオリジナリティーを求める技術開発努力や独創的技術への挑戦を、もっと真面目に評価する姿勢を持つことが、『自己幻想』から覚醒する道であるよう思われる」

それから約40年たったいま製造業の現実はどうだろうか。競争力は低下し、市場を席巻する製品はなかなか生まれないばかりか、大企業で不祥事が後を絶たない。検査不正、データ改ざん・捏造、法令違反、リコール（回収・無償修理）…。生じた亀裂は次第に広がり、破断に至る。そんな惨状を思わせる品質の劣化は日本企業の病巣となった感がある。

「科学と技術と技能、そして人間と組織と地域社会、それらの間を結ぶ強い絆、そして未来を望むことの大きさについて再確認したい」。内橋さんが追求したのは実物、実需、実体に根差した「実の技術」だ。メッセージはいまも切実に響く。

（加藤正文）

夕刊フジの名編集者として内橋克人さんら書き手を育てた島谷泰彦さん（2010年）

地域と響く「実の技術」

匠の時代 夕刊フジの連載をまとめて「先駆的開発者たちの実像」を副題に1978年に刊行された。シリーズでは三菱電機、松下電器産業（現パナソニック）、IBM、ホンダ、ミノルタ、東レなど世間が目を見張った技術革新を人間ドラマとして描いた。講談社文庫、岩波現代文庫。

神戸新聞2022.9.2.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道 ❸

規制緩和という悪夢

内橋克人とグループ二〇〇一。チームによる調査報道「規制緩和という悪夢」は1994（平成6）年7月から雑誌「文藝春秋」で3回シリーズで掲載され、バブル崩壊後の日本社会に衝撃を与えた。「こと規制緩和に関するかぎり日本の各メディアは、『規制緩和こそ日本経済を救う』という経済学者の説を最初から正しいものとして鵜呑みにし、事実の検証というジャーナリズム本来の仕事をしてこなかった。ここに私たちの仕事があると考えた」

■万能論に潜む危うさ

当時の平岩外四経団連会長を座長とする細川護熙首相の私的諮問機関、いわゆる平岩研究会の答申は「経済的規制は原則自由に、社会的規制は〈自己責任〉を原則に最小限に」。日本社会を救う万能薬としてもてはやされた。

内橋さんは60代初め。百戦錬磨の眼力は礼賛論に潜む危うさを見逃さなかった。チームは先行した米国を調査し、新産業は本当に生まれるか▽雇用はどうなるのか▽アメリカの狙いは何か―を詳細に調べた。「日本の規制緩和運動はいわば大変危険な劇薬を患者に副作用を全く知らせず投与しようとしているのと同じ」。恩恵は権力の決定機構に近い投資家、大企業、都市生活者に行く。他方、中流層をなす勤労者、中小企業、地方生活者、年金生活者は「激流の中に放り出され、多くの人々が辛酸を嘗めることになるだろう」。

市場原理至上主義批判を行った内橋克人さん＝神奈川県鎌倉市の自宅書斎（2014年）

予言は的中した。格差社会の到来だ。10年余り後の2006年刊の「悪夢のサイクル ネオリベラリズム循環」では増え続ける非正規雇用とともに所得格差が開く実情をデータで示した。増大する貧困層、増える自殺…。バブルと破綻を繰り返す中で共同体が壊される構図だ。「市場が人間を支配する思想が背景にある」として市場原理至上主義、新自由主義をあげ、その源流を探った。

■共生経済という対抗軸

「経済学は誰のためにあるのか」という問いを胸に内橋さんは経済学者にインタビューしていく。宇沢弘文、岸本重陳、佐和隆光、熊沢誠、西川潤といった碩学たちだ。規制緩和礼賛論はあるべき日本経済論、社会論を見失っているのではないか。経済学はこれをどうただすのか。

「内橋さんは自由な一人の人間として、現在起こりつつあることを冷静な目で見て、アピーリングな形で提示してくださる」。経済学者で最も深く通じ合ったのが宇沢さんだった。成長理論で業績をあげ、ソローやスティグリッツら名だたる経済学者に影響を与え、「ノーベル経済学賞に最も近い日本人」と目された数理経済学の泰斗だ。

宇沢さんが目指す経済社会の根幹として打ち出したのが「社会的共通資本」という概念だ。自然環境やインフラ、金融、教育、医療を経済学で捉え直し、「人間が人間らしく生きていける社会の器」「コモンズ」と位置づけた。市場は万能という言説への対抗軸であり、内橋さん提唱の共生経済と軌を一にするものだった。2人の対談は「始まっている未来 新しい経済学は可能か」として09年に刊行された。（加藤正文）

経済学の在り方を問う

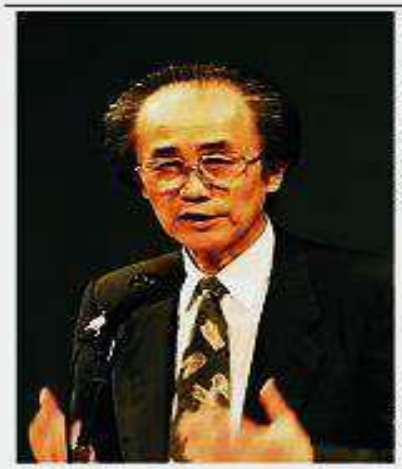
宇沢弘文さん（1928～2014年）。数理経済学者。社会的共通資本の思想で内橋克人さんと共鳴した（1995年）

規制緩和という悪夢 1995年刊。続編が「悪夢のサイクル ネオリベラリズム循環」（2006年）。市場原理至上主義批判は内橋さんの終生のテーマとなった。「経済学は誰のためにあるのか」（1997年）もアカデミズムとジャーナリズムをつなぐ書。

神戸新聞2022.9.3.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道 ④



阪神・淡路大震災から半年、講演する内橋克人さん。再生の行方を終生見続けた。「被災弱者の救済のあり方、人権意識、都市復興の進め方、全てが生身の人間を取り巻く現実となる」＝1995年7月、神戸市中央区

「叫びもとどけず、悲鳴もなく、恨みの言葉も吐かず、人も、大気も、故郷の街の全てが沈黙の闇に沈み始めている。被災地で目にしたものは、倒壊寸前、老醜をさらす実家だけではなかった」

1995年1月20日、内橋克人さんは羽田空港から間髪間もない関西空港に飛び、空港から列で神戸・ポートアイランドを経てようやく被災地にたどり着く。発生から3日。国道に連なる車列は、遅々と進む中「救援物資運搬中」。前後で立ち往生する救急車、消防車。倒壊した阪神高速道路の橋脚が見える。

■インナーシティー問題

須磨・板宿出身の内橋さんは空撮映像を見て自分の体が裸にされるように感じたという。長田、東尻池、菅原市場、商店街、市場、長屋、ケミカル工場…。少年時代から路地の奥まで知り、街の変化も実感していた。「重要なのは職住の町を中心にしたインナーシティーが空洞化していたことだ。六甲山の北側に宅地造成が猛烈な勢いで進んだ。老夫婦と年寄りがあの地域の老朽住宅に残された。今回そこがやられた」

大震災 復興への警鐘

地獄もろとも横倒しになった阪神高速道路神戸線。国道43号を西に向かうバイクや車両が走る＝1995年1月17日午後3時、神戸市東灘区深江本町

翌21日深夜、被災地で原稿を書き、送稿した。「壊滅の街から『都市と国家』を問い直す」。神戸市の行政理念だった「都市経営」の破綻として、住みよい安全な都市になっていたのかと問いかけた。「神戸市株式会社」「公共デベロッパー」として一時代を画し、「山、海へ行く」と呼ばれた開発手法で六甲山系を削り、人工島や西神、北神の大規模ニュータウンを造成した。博覧会も成功させた。都市経営は単に利潤を求め財政上の黒字を出すことを目的とせず、「最小の費用で最大の福祉を目指す」とうたったが、限界は時代とともに見え始めていた。

「神戸市が走り続け、その後をホンモノの企業が追う。自治体と企業との間には、バブル崩壊に至るまでの『日本の長い虚の時代』を通して続いた。バブル崩壊後、資産デフレの進む中、巨額の債務償還と利子支払いの負担は消えたわけではない。そこに大震災が襲った。闇の中、無残な姿をさらす生家の前に立ち、犠牲者を悼みながら考えた。老朽住宅の建て替え、生活基盤の整備、住民の立場からの区画整理、病院機能の強化…。『神戸市に欠けていたのは『都市経営』のノウハウやその巧拙ではなく、真の『都市政策』そのものだったのではないか」

■悲憤的な無残

2月19日、ルポライターの鎌田慧さんと緊急対談する。刊行したのが「大震災 復興への警鐘」だ。鎌田さんが地震の終発に太平の終わりの、時代の予兆がすると言うと、内橋さんは返した「社会全体として、何か悲憤的な無残なものがくるような、そういう怖れですね」

16年後の2011年3月11日、東日本大震災発生。巨大複合災害として原発事故を引き起こした。内橋さんは1986年刊の「原発への警鐘」というルポがある。周辺住民は突然の避難命令で自宅を追われ、警戒層に遮蔽されている。「その日までそこにあった『わがふるさと』に踏み入ることが許されない。格別の捜索隊の手で見出された亡骸との対面もDNA鑑定という責務に耐えなければならない。この無残を、私たち、私たちにつづく幾世代もの日本人は忘れることがあるだろうか」

（加藤正文）

大震災 復興への警鐘 1995年刊。阪神・淡路大震災をテーマに鎌田慧さんとの対談をまとめた。98年刊の「同時代への発言2 『消尽の世紀』の終（はて）に」は震災やエネルギーの話題。内橋克人編の新書「大震災のなかで」（2011年）は東日本大震災発生時の提言集。いずれも絶版書。

欠けていた「都市政策」

神戸新聞2022.9.4.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道 ⑤

国谷裕子さんと和やかに語り合う内橋克人さん。番組「クローズアップ現代」では約20年にわたって同時代の課題を検証した＝2014年5月、神戸市兵庫区

「私たちは、いつ、どこで踏み迷ったのだろうか」。阪神・淡路大震災から3年たった1998（平成10）年。21世紀の入り口を前にして内橋克人さんは問いかけた。この年、刊行を始めた全8巻シリーズ「同時代への発言」の初巻「日本改造論の虚実」の一文だ。「いま、世紀末の森のなかで日本人は迷妄に暮れている。社会を見渡す『まなざし』の喪失時できず、いまは見慣れのものとなり始めた。日本経済の疾走を前に多くの日本人は辛く苦い味をかみにくり返している」

■被災地の全日本化

90年代日本が重大な分岐点になる。そんな確信があった。バブルに踊り、「世界を超えた」という自負論に酔い、行政や企業の不祥事が繰り返され、その果てに未曽有の金融危機が起き、経済は閉塞の淵にある。阪神・淡路大震災では職や家をなくした人があふれたが、いまを地で経験に迷う人々のブルーテントが見える。底の見えないこの98年代不況は「被災感の全日本化」ではないか。

再生の処方箋として政府は矢継ぎ早に改革を行った。94年はスーパーの出店を容易にする大規模小売店舗法（大店法）の廃止緩和、96年には派遣労働者の対象業種を拡大する労働規制の緩和。当時66歳の内橋さんが指摘した。「誰もが、先が見えない、という閉塞感を乗り越しつつ、この『90年代日本』をやり過ごそうとしているのではないだろうか」改革という名のフィーバーも、規制緩和という方程論も、その虚実を見極めたいと痛感している」

それから二十余年。市場原理に偏した改革の結果、地域商業は立ち行きまで追い詰められ、非正規雇用は増え続け、東京一極集中の裏側で過疎化、高齢化に歯止めがかからない。

90年代不況の帰結

90年代不況はより深刻化し、リーマン・ショックでは派遣切りなどが社会問題になった＝2008年、東京・日比谷公園、年越し派遣村

働く者の尊厳見据えて

■協奏への共感

93年4月に始まったNHK番組「クローズアップ現代」で内橋さん は同月14日に初登場した。以来、2014年10月30日まで計50回出演した。その21年間は阪神・淡路大震災、金融危機、リーマン・ショック、政権交代、東日本大震災といわゆる「平成ショック」が相次いで起きた。社会変動のたびに揺かされるのが雇用だ。「職なくば人間の尊厳もない」という信念が静かな怒りと化した。

当時キャスターとして向き合った国谷裕子さんは話す。「痛みを感じている人々が痛みをもって声を上げられない。自己責任が問われ、苦しい思いをされている人がその苦しさを声にすらできない。そんな社会に内橋さんは憤りを覚えておられた」

取り上げたテーマは雇用、中小企業、商店街、町工場、貧しい暮らし、震災、農業問題、食、エネルギー…。揺れる同時代を共に見つめた国谷さんが感じたのは弱者への共感、それ故の切実さだった。「どうしたら働きがいのある労働がつくれるのか、社会転換できるのか。とりわけ若い人たちがマネーや規制緩和の勢いに翻弄されないで生きていける社会とは何を問いかけておられた」

生きる・働く・暮らす。この三つが結び付いた豊かな豊かな社会を創造する。それが内橋さんの終生のテーマになっていく。

（加藤正文）

◇次回は14日に掲載します。

90年代不況 バブル崩壊に翻弄された内橋克人さんが「同時代への発言」シリーズ刊行（1998年）、「99年」（1999年）、「21世紀の森」（2000年）を通じて、「90年代日本」を「世紀末の森」と名付けた。「迷妄」「閉塞感」「喪失感」などの言葉が使われている。（加藤）

神戸新聞2022.9.4.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道

❻

シビアアクシデント。原子力発電所が設計時の想定を超えて過酷な状態に陥る事故のことだ。米スリーマイルアイランド原発事故（1979年）、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故（86年）、東京電力福島第1原発事故（2011年）が該当する。

内橋克人さんはスリーマイルアイランド事故から3年後の1982（昭和57）年、「週刊現代」で原発をテーマに長期連載を始めた。終生、原発の危険性を指摘し続けたが、その原点となった取材だ。「いわゆる原発賛成派でもなければ、まして反対派でもなかった。どちらからの情報もマル呑み込みせず、自分の目と足と頭で冷静に確かめる、というエネルギーを、原子力発電に対してぶし向けた、ただそれだけだった」

■スロー・デス

技術、放射線と人体、補助金、PR戦略、政権与党との関係、発電コスト比較…。地域開発は人を幸せにするのか。その筆は次第に厳しさを増す。後の過酷事故を予見したかのように福島第1原発の取材は詳細をきわめた。地元福島県双葉町の町会議員の言葉をすくいあげる。「ホントに原発が安全なら、東京のまん中だってできるだろうに…」

1年余に及んだ連載で内橋さんが衝撃を受けたのがビッツバーグ大のマンクーゾ医学博士の警告だった。発がん物質の人体への影響を分析疫学の手法で調べた研究者でアスベスト（石綿）研究でも知られた。約30年間に原発で働いた労働者約2万5千人を調べた結果、がん発症の確率が高いことを突き止め、彼はくによる健康影響を示した報告を出す。「被ばくはスロー・デス（時間をかけてやってくる死）を招く」「狭い日本でもし原発事故が各地に広がった場合、一体日本人はどこに避難するのか」。博士の指摘が切実に響く。

原発への警鐘

記者会見で「原発にさようなら集会」について説明する（左から）鎌田慧さん、澤地久枝さん、内橋克人さん＝2011年6月、東京都千代田区

原発問題の連載を単行本にまとめたころ。当時52歳。精力的に取材に飛び回っていた＝1984年、米ボストン（提供）

「帰らざる河」渡った末に

見えてきたのは安全神話がつくられていく構図だ。「国がやることだから大丈夫」と鳴らされる国策の太鼓。著名人にヘルメットをかぶせて構内で撮影し、安全性をPRさせるメディア戦略。「恐るべき『日本的曖昧さ』と『無知の傲慢』に支援されて、ひとり原発は肥大化のピッチを上げ、立ち止まる暇も振り向く余裕もないまま、日本人は原発超大国への帰らざる河を渡ってしまった」

■合意なき国策

2011（平成23）年3月11日。東日本大震災発生。巨大複合災害として福島第1原発事故が起きた。幾多の警告が葬り去られた末の「人災」だった。人々の魂に根差す平衡感覚、鋭敏な危険察知能力、生あるものに必須の畏怖心。事故が示したのは、それらすべてを焼き固め、鋳型の中にねじ伏せて突進しようとする剣き出しの権力の姿に違いない」。6月15日、記者会見の席に内橋さんの姿があった。作家澤地久枝さん、ルポライター鎌田慧さんとともに声を上げた。「原子力政策は合意なき国策だ。活動期に入った地震列島日本を原発過密列島にしてはならない」

それから11年が過ぎた。政府はこれまで新増設や建て替えは想定しないとしていたが、次世代型原発の建設を検討する方針だ。回帰というべきエネルギー政策の転換が行われようとしている。（加藤正文）

◇次回は16日に掲載します。

原発への警鐘 1986年、講談社刊。雑誌連載をまとめて84年に刊行した「日本エネルギー戦争の現場」を文庫化した。福島第1原発事故の際は同書を部分収録した「日本の原発、どこで間違えたのか」を出した。朝日新聞出版刊。原発を取り巻く状況を多角的に取材・分析し、安全神話に警鐘を鳴らした。

神戸新聞2022.9.14.朝刊より

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道

❼

北海道の北東の端、オホーツク海沿岸から渚滑川に沿って奥に入る。滝上町。ここにかつてあった駅を保存した記念館がある。小さな駅舎、線路、駅名標識…。赤字ローカル線廃止対象として鉄路が消えてから約10年後の1994（平成6）年、内橋克人さんが取材に訪れた。

鉄道を失った町は自立の道を選んだ。平成の大合併に抗い、芝桜の名所として人を集め、赤い三角屋根の建物を配して「童話村」をテーマにまちづくりに取り組んだ。「都へと繋ぐ心の絆を失った同じ境遇の過疎地、中山間地、僻地、また地場産業を訪ね、荒い時代の風に立ち向かう人びとの悲嘆と勇気、逞しい想像力、健気な日常の物語を紡いだ。日本経済新聞で連載された「共生の大地」は注目を集め、岩波新書になった。滝上町のルポを収録した章を「辺境と周縁」の条理」と名づけ、扉に廃線駅の写真を載せた。

■生きる・働く・暮らす

95年の阪神・淡路大震災以降、論調に変化が出てくる。規制緩和に能を切った90年代の長期不況の実態を見据えた後、市場原理一辺倒からの脱却の意義を確信に満ちて唱えるようになった。著書が続いた。「浪費なき成長」「〈節度の経済学〉の時代」「もうひとつの日本は可能だ」「共生経済が始まる」…。当時、市場原理の対抗思潮として経済学者の宇沢弘文さんは社会的共通資本、宮本憲一さんは内発的発展、維持可能な社会を打ち出した。時を経て気候危機が差し迫った現代、斎藤幸平さんは資本主義に代わる道として「脱成長コミュニズム」を主張した。

そうした未来図を内橋さんはいち早く感知していた。私たちの社会には二つの日本がある―。市場原理を至上とする競争セクター。生きる・働く・暮らすの三つが地域で重なり合う共生セクター。周縁に目を凝らし、周縁に向かう。「二つの日本ともう二つの日本を分かつ断崖の裂け目はいよいよ地殻の奥底にまで達したように私には思われる」

周縁の条理

各地を取材で訪れた内橋克人さん。「海や山を視界の隅にとらえながら、すでに始まっている未来を現実の中に探したい」と願った（提供）

保存された渚滑線のレールと標識。内橋さんは地域再生に挑戦する住民たちの姿を追った（北海道滝上町提供）

もう一つの日本は可能だ

■FEC自給圏の形成

当時、NHK番組「クローズアップ現代」のキャスターを務めた国谷裕子さんに刻まれているのがFEC（フェック）自給圏という構想だ。フーズ（食料・農業）、エネルギー、ケア（介護・コミュニティー）の三つを地域内で自給していく社会。この三つは市場原理に委ねてはいけないんだ、市民が手放してはいけないんだということを四半世紀も前に言いだしておられた」

東日本大震災の起きた2011年の10月17日放送の「自給力～食とエネルギーを自給する暮らしの可能性」で新たな動きを示す映像の後、内橋さんは「これはノスタルジアではなく日本の未来を先取りした姿だ」と述べた。国谷さんは振り返る。「FECは基礎的な生存条件であり、そこにこだわることで地域に基幹産業も生み出せ、雇用機会も生まれ、尊厳ある労働につながる。必要なのが自覚的消費者だ。一人一人が、考える消費者になって『買う』という行為で地域を支えよう。内橋さんが繰り返して伝えてくれたメッセージだ」（加藤正文）

◇次回は21日に掲載します。

FEC自給圏の形成 フーズ、エネルギー、ケアの頭文字を合わせた。内橋克人さんが提唱した自給自足圏を基礎にした経済社会。「浪費なき成長」（2000年、光文社）などに詳しい。「共生の大地」（1995年、岩波新書）、「同時代への発言6 周縁の条理」（99年、岩波書店）は地域再生の胎動を描く。

神戸新聞2022.9.16.朝刊より

共生の大地へ
没後1年・内橋克人の歩いた道 ❽

「頂点同調主義」の危うさ

「人間復興」の経済を目指して

2005（平成17）年8月20日午後。郵政解散に打って出た小泉純一郎首相（当時）が神戸・元町を遊説に訪れ、大観衆を前に演説した。同じころ内橋克人さんは近くのホールで語りかけていた。「今、満員のこの会場こそ声なき人々の声、力なき人々の力で満たされている」。神戸大空襲を語る会での講演だった。

その60年前の3月17日。大空襲で神戸の西半分が焼かれた。死者2600人以上。当時12歳の内橋さんはその前日、虫垂炎を発症し入院した。本来座るはずだった自宅裏の防空壕の席に母親代わりのような女性が座った。そこに焼夷弾が直撃し、壕は崩れた。父が掘り返した。「身を少し傾け、泥にまみれ、眠ったように座っていた。打たれた肩の形は崩れ、赤黒いものが左半身をべったりと覆っていた」（「荒野渺茫」）。身代わりによって自分の生がある。終生、胸に抱き続けた。

■権論と民論

「改革なくして成長なし」「自民党をぶっ壊す」…。小泉流政治に国民は喝采を送り、時代の流れが大きく渦巻いた。これを時の政権、権力、支配層の利害を代弁する「権論」と呼んだ内橋さんは市井の「民論」の立場から批判した。「『官から民へ』というが、その民の中に市民、国民は入っているのか。民とは民間巨大資本のことではないか」

権論によって増幅される時代の流れ。異を唱えるものは排除される。「戦争前、扇動に乗せられた国民は熱狂し『鬼畜米英を撃て』と叫び、街なかを行進した」。少年の目に刻まれた光景。権威、権力に弱く、自ら上に合わせていく。そうした日本人の心性を哲学者久野収さんは「頂点同調主義」と呼んだ。危うさを知る内橋さんは繰り返した。「私たちの社会は戦前戦後変わっていない」。強いものに弱く、弱い者には強い。なぜノーと言えないのか。「私はここにこそ大きなテーマをみている」

神戸空襲の体験を語る内橋克人さん。「頂点同調主義にからめとられた私たち日本人の弱さ。再びその奔流が色濃く突出してきた」＝2005年8月、神戸市中央区

未明の大空襲で建物が焼け落ち煙がくすぶる中を行き交う市民ら＝1945（昭和20）年3月17日、国鉄元町駅から西を望む

「人間復興」の経済を目指して　城山三郎さん、内橋克人さんの対談集。2002年、朝日新聞社。ほかに2人の対談は「失われた志」（文春文庫、00年）にも収められている。内橋さんの戦争体験は自伝的小説「荒野渺茫（びょうぼう）」（岩波書店、13年）に詳しい。

作家
城山三郎さん

■城山三郎さんとの対話

敬愛し、対話を重ねたのが5歳年上の作家城山三郎さん（1927〜2007年）だった。少年兵に志願した海軍で徹底的に個を押しつぶされた。組織のために虐げられる個人。戦後社会も個が置き去りにされる。組織と個人をテーマに経済小説の新境地を切り開いた。自由な個を脅かす風潮と対峙し、晩年には個人情報保護法の制定時に「言論弾圧につながる」と反対の論陣を張った。「戦争で日本が得られたものは憲法だけだ」が持論だった。

内橋さんは城山作品を読み解き、戦争と国家と並ぶ重要な柱として経済恐慌に注目した。昭和恐慌から開戦に至った道筋を踏まえ、バブル崩壊後の90年代不況がなぜ平成恐慌に至る手前で防ぐことができたのか。「戦争放棄の憲法9条、生存権の25条が歯止めになった」と言うと城山さんは返した。「全く同感だ」

2人は雑誌「論座」の企画で3回にわたって対談した。大失業時代、敗者復活のある社会、昭和恐慌と平成恐慌—をテーマに語り合い、対談集「『人間復興』の経済を目指して」を出した。

（加藤正文）

◇次回は23日に掲載します。

神戸新聞2022.9.21.朝刊より

共生の大地へ
没後1年・内橋克人の歩いた道 ❾

状況に強い危機感 最期まで

民主主義をあきらめない

神戸市須磨区で生まれ育った内橋克人さんは海が好きだった。約30年暮らし、終の棲家となった神奈川県鎌倉市の自宅。海が見たくなると由比ケ浜海岸まで歩いた。

その鎌倉で作家井上ひさしさん、精神科医なだいなださんと連名で呼びかけ人となり、2005（平成17）年に「鎌倉・九条の会」ができた。その後、10年に井上さん、13年、なださんが亡くなった。発足10年を記念した15年5月の会で内橋さんは話した。「大切なお二人の姿はすでになく、悲しく、寂しく、私は立ちすくむ思いでここにいます」

差し迫る時代状況に危機感が強まっていた。当時の安倍晋三首相は集団的自衛権行使を容認する安全保障関連法の成立へ躍起になり、反対論を押し切る形で14年7月、憲法9条の解釈変更を閣議決定し、15年9月に成立させた。国会周辺には「戦争法案、絶対反対」のコールが響いた。

「一本一本の花を引き抜く、そういう時代がこの日本社会にもやってくるかもしれない。けれども、どんなに強い権力をもってしても、やってくる春を止めることはできない」。講演はブックレット「民主主義をあきらめない」に収録された。

■最後まで発言

21年7月2日、89歳になった。体調がすぐれず、月末、心臓が苦しくなったが、病院に行かず横になって過ごした。8月1日朝、NHKラジオ「マイあさ！」に出演した。柔らかで本質を突くラジオでの経済評論は人気で長年続いていた。この日のテーマは「脱炭素社会—日本の針路を考える」。質問と回答を書いたシナリオに、聞き取りやすいように区切りの記号も入れ、強調すべき箇所はひときわ濃く蛍光ペンを引いた。気候変動に伴い世界各地で自然災害が頻発している状況から説き起こし、温室効果ガスの削減に触れ、とりわけ「石炭火力」の問題に鋭くメスを入れた。

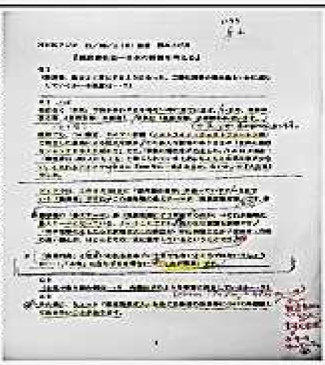
1982（昭和57）年に原発を取材し「原発への警鐘」を刊行。エネルギーを取り巻く政官財の問題に精通していた。「日本では口では『脱炭素』を唱えながら実際には例えば『効率的な火力発電へシフト』などと平気で口にする識者が大手を振っているありさまです」と書き足した。「石炭火力をどう見直していくか。今朝のテーマもそれに尽きると思います」

放送3日後の8月4日、急性心筋梗塞で救急搬送され、入院。9月1日、息を引き取った。最期まで書きたいという思いだったという。

◇　◇

今年7月末、一周忌を前に内橋さんのお宅を訪ねたとき、書斎に向かう廊下の棚に封筒が立てかけてあるのに気付いた。表紙には自筆で「記者三訓　ジャーナリストの心構え」と書かれていた。1957年、神戸新聞で記者として歩き出したころ先輩からたたき込まれた鉄則だという。「必ず現場へ行き、自分の目で確かめろ」「上（権威や上司）を向いて仕事をするな」「攻める側ではなく、攻められる側に最後まで踏みとどまれ」。この三訓を胸に戦後社会の険しい道を歩いた。首尾一貫した見事な人生だった。

（加藤正文）
＝おわり＝



書斎の机上に置かれた最後のラジオ出演の原稿。番組のファンは多く、亡くなった後は3回にわたってアンコール放送があった＝神奈川県鎌倉市

若き日の内橋克人さん。神戸新聞記者時代にたたき込まれた「記者三訓」を胸に取材に飛び回り、数々の著書を出した（提供）

講演する内橋克人さん。晩年、兵庫で話すとひときわ熱い思いがこもった＝2018年11月、姫路市

民主主義をあきらめない　岩波ブックレット、2015年刊。鎌倉・九条の会で行った講演を収録した。同会は05年発足。大江健三郎さん、内橋克人さんらの講演を収録した同ブックレット「取り返しのつかないものを、取り返すために」（11年）もある。

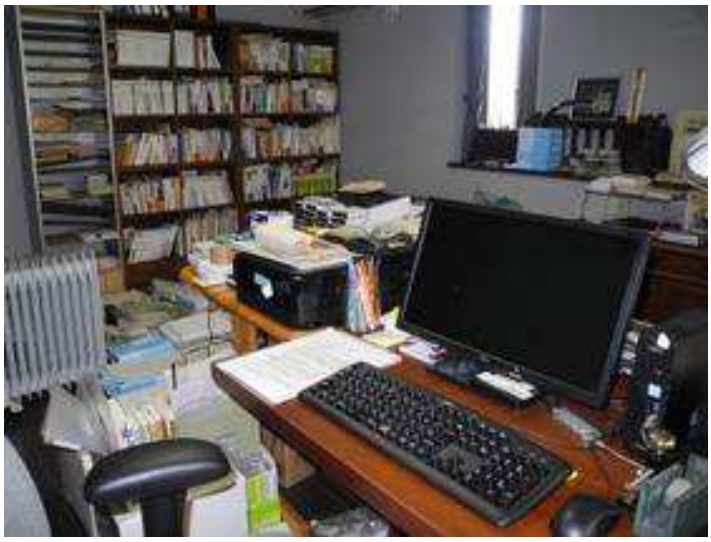
神戸新聞2022.9.23.朝刊より

共生の大地へ　没後１年・内橋克人の歩いた道

（１）荒野渺茫（びょうぼう）　筆一本、真っすぐに生きた

2022.09.01

柔和なまなざしで経済社会の本質を見続けた＝２００７年、大阪市北区



内橋克人さんの書斎。たゆまぬ努力で取材と思索を重ね、膨大な著作を世に出した＝２０２２年７月３１日、神奈川県鎌倉市

今しがたまで内橋克人さんが机に向かって執筆に打ち込んでいたかのようだ。神奈川県鎌倉市の自宅書斎。膨大な書籍と資料が並ぶ。机上にはＮＨＫのラジオ用原稿。蛍光ペンで線を引き、補足が書き込まれている。最後のメッセージとなった２０２１年８月１日放送「脱炭素社会－日本の針路を考える」だ。

急性心筋梗塞で救急搬送されたのは３日後の４日。自身は帰宅できるつもりだったというが、次第に容体は悪化し、９月１日午後４時３７分、亡くなった。享年８９。それから１年。妻泰子さん（８５）は話した。「真っすぐに前を向いて走る人でしたね。本当に横向かないです。真面目に真っすぐ行く人でした…」

１９３２（昭和７）年、神戸市須磨区生まれ。１２歳のとき神戸空襲を経験。神戸商科大（現兵庫県立大）を卒業した５７年、神戸新聞に入り、経済記者として歩みだした。以来６４年、筆一本で駆け抜けた。

「最初の７年間だけは神戸新聞にいたが、その後はいかなる組織にも属さずやってきた。いま何が始まっているのか、それが未来を明るくするいい芽なのか、逆にこれは危ないぞということなのか。この識別

「今日に明日をつなぐ人々の営みこそが経済の本質」。静かに語る内橋克人さん＝２００３年、東京都千代田区

経済評論家 内橋克人 主要作品リスト

（タイトルは単行本時。文庫化時に変更あり）

1960年代	外資のなかのニッポン
1970年代	恐るべき外資企業、優越感への挑戦、挑戦する幹部、伝説の日本人、危機こそ好機である、『安宅崩壊』以後、恐慌、匠の時代シリーズ（～1980年代）
1980年代	経営の狂、ニッポン地球時代、幻想の『技術一流国』ニッポン、社長辞表、日本エネルギー戦争の現場、考える一族 カシオ四兄弟、『重厚長大』の復権、原発への警鐘、ガンを告げる眼鏡、『手法革命』の時代、ジャパン・システム激変の新図式、遅き際の研究、KKニッポンを解る（共著）
1990年代	森敬おく前わざる企業、『革新』已む前わざる企業、隠より始めよ、破綻か再生か、共生の大地、内橋克人同時代への発言（全8巻）、「会社本位主義」をどう超える（共著）、日本会社京讃（共編著）、規制緩和という悪夢（共編著）、大震災復興への警鐘（共著）、経済学は誰のためにあるのか（編著）、現代日本文化論・仕事の創造（共同執筆）、原発縮和 何をもたらすか（共著）
2000年代	同時代の読み方、不安社会を生きる、浪費なき成長－新しい経済の起点、＜節度の経済学＞の時代、もうひとつの日本は可能だ、『共生経済』が始まる、悪夢のサイクル、共生経済が始まる、日本の原発、どこで間違えたのか、荒野渺茫、誰のための改革か（編著）、「人間復興」の経済を目指して（共著）、ラテン・アメリカは警告する（共編）、魂山三部 命の旗（共編）、始まっている未来（共著）、大震災のなかで－私たちは何をすべきか（編著）、取り返しのつかないものを、取り返すために（共著）

神戸新聞ＮＥＸＴ

を他の人より相当早く、ある種のにおいで感じ取ることができるようになった」

国家や経済の大義が個人を脅かしてはならない。現場を歩きながら人間が主人公の「共生経済」を説き続けた。信念の原点となったのが大切な人の命が奪われた神戸空襲であり、その半世紀後の阪神・淡路大震災だった。

書斎のデスクトップパソコンの後ろに止まったままの掛け時計が横たえてある。針が指し示すのは大震災発生時刻の５時４６分。あの瞬間、浮かび上がった社会の断面。「平常時には深い地底にもぐったまま、滅多（めった）なことで人の目に触れることのない真の『断層』の姿に違いない」

戦争と震災の体験を二重写しにした自伝的作品「荒野渺茫（びょうぼう）」（２０１３年）でつづった。「いま、『暗い時代』への予感は的中し、一度は地に埋めたはずの『戦中・戦前なるもの』が新たな装いを凝らしてむくむくと立ち上がり、荒い呼吸で四囲（しい）を封じ込める」

◇　◇

■本質見抜いた洞察力

内橋克人さんなら、いま同時代にどんなメッセージを発しただろう。収束が見通せないパンデミック（世界的大流行）、迫りくる気候崩壊、ロシアのウクライナ侵攻で戦争も現実となった。国内では安倍晋三元首相の銃撃事件が起きた。揺れる世情にあって目指すべき社会の姿はますます不透明になっている。

■危険な予兆

「時代状況としてとらえる目が必要」が持論だった。歴史の証言として「昭和恐慌」を意識していた。１９７８年の「ドキュメント恐慌」。失業、生活困難、自殺…。「追いつめられるごく普通の生活者の姿は、あの『昭和恐慌』の時代を彷彿（ほうふつ）とさせる」。社会不安の中、濱口雄幸、井上準之助、団琢磨らを襲ったテロとなり、戦争と軍国主義への道

に至った。「暗い時代の危険な予兆。恐慌が高じて戦争に至る」と評論家の佐高信さん（７７）との対談で語った。

終生、権力におもねらず、市井の人々の目線で現状を分析し、警鐘を鳴らした。「市場と権力」「資本主義と闘った男」を書いたジャーナリスト佐々木実さん（５６）は「経済ジャーナリズムでは経営者目線や当局目線になり、ビジネス情報の領域で処理されることが多い。社会的な視点に立って経済を語る人は極めて稀（まれ）で内橋さんはその極めて稀な先達（せんだつ）だった」。

時代を見抜く慧眼（けいがん）と洞察力。出世作となった「匠（たくみ）の時代」（７８年～８０年代）では人と技術の接点領域に光を当てた。一世を風靡したＮＨＫ番組「プロジェクトＸ」より２０年以上前のアプローチだった。

■規制緩和万能論の虚妄

９０年代、バブル経済が崩壊した後、規制緩和万能論が声高に叫ばれた。労働法制など各分野で市場原理を働かせればイノベーション（技術革新）が起き、安定した経済成長が実現できる。そうした言説に対し、９５年の「規制緩和という悪夢」で米国航空業界の実情を調べ、安全性が損なわれるなどの問題点を告発した。「企業行動の規制を外していくのですから、市民社会としては抵抗の術がなくなる。こうしたリスクがあることを、われわれは肝に銘ずるべきです」

「例外なき規制緩和」は何をもたらしたか。非正規雇用は働く人の４割近くになり、格差拡大を招いた。大規模店舗の相次ぐ進出で地域の商店街や市場ではシャッター通りが増え、疲弊の中にある。

現実の経済社会と切り結びながら、持論の「生きる・働く・暮らす」が地域で響き合う未来を見通していた。「尊敬おく能（あた）わざる企業」「共生の大地」「もうひとつの日本は可能だ」「始まっている未来」…。題名から内橋ロマンが立ち上ってくる。

■

９月１日で没後１年になる。戒名は「志峯院厳岳良克居士」。高い志を胸に厳しい峯（みね）を目指した生涯。神戸を起点に戦後社会の渺茫たる荒野を歩き、共生への希望を説き続けた一人のジャーナリストの軌跡を言葉と作品でつづる。（加藤正文）

【内橋克人】（うちはし・かつと、１９３２～２０２１年）神戸市生まれ。神戸商科大（現兵庫県立大）卒。神戸新聞経済部記者を経て独立。著書多数。神戸新聞客員論説委員も務めた。

【特集ページ】経済評論家　内橋克人を読む

共生の大地へ　没後１年・内橋克人の歩いた道

（２）匠の時代　地域と響く「実の技術」

2022.09.02

取材に明け暮れていた頃の内橋克人さん。記者時代から現場取材を鉄則にしていた（提供）

「技術はちょうど地下の伏流水のように、いつか商品や時代の流れを変えてしまうことになるんだ」。若いエンジニアたちが議論を交わす（「電卓戦争の軌跡－シャープとカシオ」）。「お前たち、自分は旋盤工として採用されたんだ、と思え。現場を知らない技術者なんて、ウチでは不要なんだから」。現場に発想の原点がある（「セイコー・クオーツの世界」）。

■あふれるリアリティー

内橋克人さんの出世作となった「匠（たくみ）の時代」。１９７８（昭和５３）年に夕刊フジで始まった連載は一躍脚光を浴びる。新しい原理を見いだし、手法革命に情熱を傾ける匠たちの群像。緻密な取材に基づく臨場感、豊富なエピソード、情感あふれる文章…。連載はシリーズ化され、後に１２冊の文庫になるほどの生命力を持った。４０年を経た今も瑞々（みずみず）しい。

当時、夕刊フジの経済担当部長だった島谷（しまや）泰彦さん（８月に９０歳で死去）は内橋さんや作家高杉良さん、評論家佐高信さんら後に大成する書き手を積極登用していく。中でも同い年の内橋さんを高く評価し、企画を任せる。「匠」という言葉になじみが薄かった時代だ。上り下りしたビルの階段、くぐった工場の門、歩いた

夕刊フジの名編集者として内橋克人さんら書き手を育てた島谷泰彦さん（２０１０年）

生産現場、語り合った技術者たち…。「取材は結果的に成功したが、悪戦苦闘だった。執筆者の内橋さんの疲労度は到底、私の及ぶところではなかった」。粘りに粘ってすくいあげた人間ドラマはリアリティーにあふれた。

■自賛論への警鐘

８０年代初頭、バブル経済に向かう時期、日本企業の技術は米欧を超え、超一流だという「自賛論」が盛り上がっていく。戦後の「追いつき追い越せ」を合言葉に登った頂で得た「ジャパン・アズ・ナンバーワン」という賛辞に酔った。

危機感を抱いた内橋さんは「幻想の『技術一流国』ニッポン」（８２年）を出す。日本企業の強みは生産現場で発揮される労働や技能の質に依存する傾向が強い。その現状に触れつつ、弱点として真の創造技術を育む風土の脆弱（ぜいじゃく）さを指摘した。教育、生産構造、研究体制…。「『アメリカを超えた』などと言わず、せめて高度のオリジナリティーを求める技術開発努力や独創的技術への挑戦を、もっと真面目に評価する姿勢を持つことが、『自己幻想』から覚醒する道であるよう思われる」

それから約４０年たったいま製造業の現実はどうだろうか。競争力は低下し、市場を席巻する製品はなかなか生まれないばかりか、大企業で不祥事が後を絶たない。検査不正、データ改ざん・捏造（ねつぞう）、法令違反、リコール（回収・無償修理）…。生じた亀裂は次第に広がり、破断に至る。そんな惨状を思わせる品質の劣化は日本企業の病巣となった感がある。

「科学と技術と技能、そして人間と組織と地域社会、それらの間を結ぶ強い絆、そして未来を望むことの大きさについて再確認したい」。内橋さんが追求したのは実物、実需、実体に根差した「実の技術」だ。メッセージはいまも切実に響く。（加藤正文）

【匠の時代】夕刊フジの連載をまとめて「先駆的開発者たちの実像」を副題に１９７８年に刊行された。シリーズでは三菱電機、松下電器産業（現パナソニック）、ＩＢＭ、ホンダ、ミノルタ、東レなど世間が目を見張った技術革新を人間ドラマとして描いた。講談社文庫、岩波現代文庫。

【特集ページ】経済評論家　内橋克人を読む

共生の大地へ　没後１年・内橋克人の歩いた道

（３）規制緩和という悪夢　経済学の在り方を問う

2022.09.03

市場原理至上主義批判を行った内橋克人さん＝神奈川県鎌倉市の自宅書斎（２０１４年）

宇沢弘文さん（１９２８～２０１４年）。数理経済学者。社会的共通資本の思想で内橋克人さんと共鳴した（１９９

内橋克人とグループ二〇〇一。チームによる調査報道「規制緩和という悪夢」は１９９４（平成６）年７月から雑誌「文藝春秋」で３回シリーズで掲載され、バブル崩壊後の日本社会に衝撃を与えた。「こと規制緩和に関するかぎり日本の各メディアは、『規制緩和こそ日本経済を救う』という経済学者の説を最初から正しいものとして鵜呑（うの）みにし、事実の検証というジャーナリズム本来の仕事をしてこなかった。ここに私たちの仕事があると考えた」

■万能論に潜む危うさ

当時の平岩外四経団連会長を座長とする細川護熙（もりひろ）首相の私的諮問機関、いわゆる平岩研究会の答申は「経済的規制は原則自由に、社会的規制は〈自己責任〉を原則に最小限に」。日本社会を救う万能薬としてもてはやされた。

内橋さんは６０代初め。百戦錬磨の眼力は礼賛論に潜む危うさを見逃さなかった。チームは先行した米国を調査し、新産業は本当に生まれるか▽雇用はどうなるのか▽アメリカの狙いは何か－を詳細に調べた。「日本の規制緩和運動はいわば大変危険な劇薬を患者に副作用を全く知らせず投与しようとしているのと同じ」。恩恵は権力の決定機構に近い投資家、大企業、都市生活者に行く。他方、中流層をなす勤労者、中

５年）

小企業、地方生活者、年金生活者は「激流の中に放り出され、多くの人々が辛酸を嘗（な）めることになるだろう」。

予言は的中した。格差社会の到来だ。１０年余り後の２００６年刊の「悪夢のサイクル　ネオリベラリズム循環」では増え続ける非正規雇用とともに所得格差が開く実情をデータで示した。増大する貧困層、増える自殺…。バブルと破綻を繰り返す中で共同体が壊される構図だ。「市場が人間を支配する思想が背景にある」として市場原理至上主義、新自由主義をあげ、その源流を探った。

■共生経済という対抗軸

「経済学は誰のためにあるのか」という問いを胸に内橋さんは経済学者にインタビューしていく。宇沢弘文、岸本重陳、佐和隆光、熊沢誠、西川潤といった碩学（せきがく）たちだ。規制緩和礼賛論はあるべき日本経済論、社会論を見失っているのではないか。経済学はこれをどうただすのか。

「内橋さんは自由な一人の人間として、現在起こりつつあることを冷静な目で見て、アピーリングな形で提示してくださる」。経済学者で最も深く通じ合ったのが宇沢さんだった。成長理論で業績をあげ、ソローやスティグリッツら名だたる経済学者に影響を与え、「ノーベル経済学賞に最も近い日本人」と目された数理経済学の泰斗だ。

宇沢さんが目指す経済社会の根幹として打ち出したのが「社会的共通資本」という概念だ。自然環境やインフラ、金融、教育、医療を経済学で捉え直し、「人間が人間らしく生きていける社会の器」「コモンズ」と位置づけた。市場は万能という言説への対抗軸であり、内橋さん提唱の共生経済と軌を一にするものだった。２人の対談は「始まっている未来　新しい経済学は可能か」として０９年に刊行された。（加藤正文）

【規制緩和という悪夢】１９９５年刊。続編が「悪夢のサイクル　ネオリベラリズム循環」（２００６年）。市場原理至上主義批判は内橋さんの終生のテーマとなった。「経済学は誰のためにあるのか」（１９９７年）もアカデミズムとジャーナリズムをつなぐ書。

【特集ページ】経済評論家　内橋克人を読む

共生の大地へ　没後１年・内橋克人の歩いた道

（４）大震災復興への警鐘　欠けていた「都市政策」

2022.09.07

阪神・淡路大震災から半年。講演する内橋克人さん。再生の行方を終生見続けた。「被災弱者の救済のあり方、人権意識、都市復興の進め方、全てが生身の人間を取り巻く現実となる」＝１９９５年７月、神戸市中央区

「叫び声も上げず、悲鳴もなく、恨みの言葉も吐かず、人も、大気も、故郷の街の全てが沈黙の闇に沈み始めている。被災地で目にしたものは、倒壊寸前、老醜をさらす実家だけではなかった」

１９９５年１月２０日。内橋克人さんは羽田空港から開港間もない関西空港に飛び、空港から船で神戸・ポートアイランドを経てようやく被災地にたどり着く。発生から３日。国道に連なる車列は「遺体搬送中」「救援物資運搬中」。前後で立ち往生する救急車、消防車。倒壊した阪神高速道路の橋脚が見える。

■インナーシティー問題

須磨・板宿出身の内橋さんは空撮映像を見て自分の体が裸にされるように感じたという。長田、東尻池、菅原市場。商店街、市場、長屋、ケミカル工場…。少年時代から路地の奥まで知り、街の変化も実感していた。「重要なのは職住の町を中心にしたインナーシティーが空洞化していたことだ。六甲山の北側に宅地造成が猛烈な勢いで進んだ。老夫婦と年寄りがあの地域の老朽住宅に残された。今回そこがやられた」

翌２１日深夜、被災地で原稿を書き、送稿した。「壊滅の街から『都市と国家』を問い直す」。神戸市の行政理念だった「都市経営」の帰結として、住みよい安全な都

橋脚もろとも横倒しになった阪神高速道路神戸線。国道４３号を西に向かうバイクや車両が走る＝１９９５年１月１７日午後３時、神戸市東灘区深江本町

市になっていたのかと問いかけた。「神戸市株式会社」「公共デベロッパー」として一時代を画し、「山、海へ行く」と呼ばれた開発手法で六甲山系を削り、人工島や西神、北神の大規模ニュータウンを造成した。博覧会も成功させた。都市経営は単に利潤を求め財政上の黒字を出すことを目的とせず、「最小の費用で最大の福祉を目指す」とうたったが、限界は時代とともに見え始めていた。

「神戸市が走り続け、その後をホンモノの企業が追う。自治体と企業との蜜月は、バブル崩壊に至るまでの『日本の長い虚の時代』を通じて続いた。バブル崩壊後、資産デフレの進む中、巨額の債務償還と利子支払いの負担は消えたわけではない」。そこに大震災が襲った。雨の中、無残な姿をさらす生家の前に立ち、犠牲者を悼みながら考えた。老朽住宅の建て替え、生活基盤の整備、住民の立場からの区画整理、病院機能の強化…。「神戸市に欠けていたのは『都市経営』のノウハウやその巧拙ではなく、真の『都市政策』そのものだったのではないか」

■悲愴的な無残

２月１９日。ルポライターの鎌田慧さんと緊急対談する。刊行したのが「大震災　復興への警鐘」だ。鎌田さんが地震の続発に太平の終わりの、時代の予感がすると言うと、内橋さんは返した。「社会全体として、何か悲愴（ひそう）的な無残なものがくるような、そういう怖（おそ）れですね」

１６年後の２０１１年3月１１日。東日本大震災発生。巨大複合災害として原発事故を引き起こした。内橋さんには１９８６年刊の「原発への警鐘」というルポがある。周辺住民は突然の避難命令で自宅を追われ、警戒柵に遮蔽（しゃへい）されている。「その日までそこにあった『わがふるさと』に踏み入ることが許されない。格別の捜索隊の手で見出された亡骸（なきがら）との対面もＤＮＡ鑑定という責務に耐えなければならない。この無残を、私たち、私たちにつづく幾世代もの日本人は赦（ゆる）すことがあるだろうか」（加藤正文）

【大震災　復興への警鐘】１９９５年刊。阪神・淡路大震災をテーマに鎌田慧さんとの対談をまとめた。９８年刊の「同時代への発言２　『消尽の世紀』の涯（はて）に」は震災やエネルギーの論集。内橋克人編の新書「大震災のなかで」（２０１１年）は東日本大震災発生時の提言集。いずれも岩波書店。

【特集ページ】経済評論家　内橋克人を読む

共生の大地へ　没後１年・内橋克人の歩いた道

（５）９０年代不況の帰結　働く者の尊厳見据えて

2022.09.09

ＮＨＫ番組「クローズアップ現代」のキャスターとして内橋克人さんと向き合った国谷裕子さん。内橋さんの弱者へのまなざしを感じていた

「私たちは、いつ、どこで踏み迷ったのだろうか」。阪神・淡路大震災から３年たった１９９８（平成１０）年。２１世紀の入り口を前にして内橋克人さんは問いかけた。この年、刊行を始めた全８巻シリーズ「同時代への発言」の初巻「日本改革論の虚実」の一文だ。「いま、世紀末の森のなかで日本人は途方に暮れている。社会を見舞う“まさか”の異常時でさえ、いまは日常のものとなり始めた。日本経済の迷走を前に多くの日本人は辛（つら）く苦い呟（つぶや）きを心にくり返している」

■被災地の全日本化

９０年代日本が重大な分岐点になる。そんな確信があった。バブルに踊り、「世界を超えた」という自賛論に酔い、行政や企業の不祥事が繰り返され、その果てに未曽有の金融危機が起き、銀行は破綻の淵にある。阪神・淡路大震災では職や家をなくした人があふれたが、いま各地で路頭に迷う人々のブルーテントが見える。底の見えないこの９０年代不況は「被災地の全日本化」ではないか。

再生の処方箋として政府は矢継ぎ早に改革を行った。９４年はスーパーの出店を容易にする大規模小売店舗法（大店法）の規制緩和、９６年には派遣労働者の対象業種を拡大する労働規制の緩和。当時６６歳の

９０年代不況はより深刻化し、リーマン・ショックでは派遣切りなどが社会問題になった＝２００８年、東京・日比谷公園、年越し派遣村

内橋さんが指摘した。「誰もが、先が見えない、という常套句（じょうとうく）を繰り返しつつ、この“９０年代日本”をやり過ごそうとしているのではないだろうか」「改革という名のフィーバーも、規制緩和という万能論も、その虚実を見究（みきわ）めたいと希求している」

それから二十余年。市場原理に即した改革の結果、地域商業はぎりぎりまで追い詰められ、非正規雇用は増え続け、東京一極集中の裏側で過疎化、高齢化に歯止めがかからない。

■弱者への共感

９３年４月に始まったＮＨＫ番組「クローズアップ現代」で内橋さんは同１４日に初登場した。以来、２０１４年１０月３０日まで計５０回出演した。その２１年間は阪神・淡路大震災、金融危機、リーマン・ショック、政権交代、東日本大震災といわゆる「平成ショック」が相次いで起きた。社会変動のたびに脅かされるのが雇用だ。「職なくば人間の尊厳もない」という信念が静かな怒りと化した。

当時キャスターとして向き合った国谷裕子さんは話す。「痛みを感じている人々が痛みすらも声を上げられない。自己責任が問われ、苦しい思いをされている人がその苦しさを声にすらできない。そんな社会に内橋さんは憤りを覚えておられた」

取り上げたテーマは雇用、中小企業、商店街、町工場、貸し渋り、震災、集落崩壊、食、エネルギー…。揺れる同時代を共に見つめた国谷さんが感じたのは弱者への共感、それ故の切実さだった。「どうしたら働きがいのある労働がつくれるのか、社会転換できるのか。とりわけ弱い人たちがマネーや規制緩和の勢いに翻弄（ほんろう）されないで生きていける社会とはを常に問いかけておられた」

生きる・働く・暮らす。この三つが結び付いた温かで勁（つよ）い社会を創造する。それが内橋さんの終生のテーマになっていく。（加藤正文）

【９０年代不況】バブルの過熱に警鐘を鳴らした内橋克人さんは不況の長期化を予見し、「９０年代不況」と名付けた。「同時代への発言」シリーズ初巻「日本改革論の虚実」（１９９８年刊）、第７巻「九〇年代不況の帰結」（９９年刊）は規制緩和や改革の狙いを論じるとともに現状分析を行っている。岩波書店。

【特集ページ】経済評論家　内橋克人を読む

共生の大地へ　没後１年・内橋克人の歩いた道

（６）原発への警鐘　「帰らざる河」渡った末に

2022.09.14

記者会見で「原発にさようなら集会」について説明する（左から）鎌田慧さん、澤地久枝さん、内橋克人さん＝２０１１年６月、東京都千代田区

原発問題の連載を単行本にまとめたころ。当時５２歳。精力的に取材に飛び回っていた＝１９８４年、米ボストン（提供）

シビアアクシデント。原子力発電所が設計時の想定を超えて過酷な状態に陥る事故のことだ。米スリーマイルアイランド原発事故（１９７９年）、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故（８６年）、東京電力福島第１原発事故（２０１１年）が該当する。

内橋克人さんはスリーマイルアイランド事故から３年後の１９８２（昭和５７）年、「週刊現代」で原発をテーマに長期連載を始めた。終生、原発の危険性を指摘し続けたが、その原点となった取材だ。「いわゆる原発賛成派でもなければ、まして反対派でもなかった。どちらからの情報もマル呑（の）み込みせず、自分の目と足と頭で冷静に確かめる、というエネルギーを、原子力発電に対してさし向けた、ただそれだけだった」

■スロー・デス

技術、放射線と人体、補助金、ＰＲ戦略、政権与党との関係、発電コスト比較…。地域開発は人を幸せにするのか。その筆は次第に厳しさを増す。後の過酷事故を予見したかのように福島第１原発の取材は詳細をきわめた。地元福島県

双葉町の町会議員の言葉をすくいあげる。「ホントに原発が安全なら、東京のまん中だってできるだろうに…」

１年余に及んだ連載で内橋さんが衝撃を受けたのがピッツバーグ大のマンクーゾ医学博士の警告だった。発がん物質の人体への影響を分析疫学の手法で調べた研究者でアスベスト（石綿）研究でも知られた。約３０年間に原発で働いた労働者約２万５千人を調べた結果、がん発症の確率が高いことを突き止め、被ばくによる健康影響を示した報告を出す。「被ばくはスロー・デス（時間をかけてやってくる死）を招く」「狭い日本でもし原発事故が各地に広がった場合、一体日本人はどこに避難するのか」。博士の指摘が切実に響く。

見えてきたのは安全神話がつくられていく構図だ。「国がやることだから大丈夫」と鳴らされる国策の太鼓。著名人にヘルメットをかぶせて構内で撮影し、安全性をＰＲさせるメディア戦略。「恐るべき『日本的曖昧さ』と『無知の傲慢（ごうまん）』に支援されて、ひとり原発は肥大化のピッチを上げ、立ち止まる暇も振り向く余裕もないまま、日本人は原発超大国への帰らざる河（かわ）を渡ってしまった」

■合意なき国策

２０１１（平成２３）年３月１１日。東日本大震災発生。巨大複合災害として福島第１原発事故が起きた。幾多の警告が葬り去られた末の「人災」だった。人々の魂に根差す平衡感覚、鋭敏な危険察知能力、生あるものに必須の畏怖（いふ）心。事故が示したのは「それらすべてを焼き固め、鋳型の中にねじ伏せて突進しようとする剥（む）き出しの権力の姿に違いない」。６月１５日、記者会見の席に内橋さんの姿があった。作家澤地久枝さん、ルポライター鎌田慧さんとともに声を上げた。「原子力政策は合意なき国策だ。活動期に入った地震列島日本を原発過密列島にしてはならない」

それから１１年が過ぎた。政府はこれまで新増設や建て替えは想定しないとしていたが、次世代型原発の建設を検討する方針だ。回帰というべきエネルギー政策の転換が行われようとしている。（加藤正文）

【原発への警鐘】１９８６年、講談社刊。雑誌連載をまとめて８４年に刊行した「日本エネルギー戦争の現場」を文庫化した。福島第１原発事故の際は同書を部分収録した「日本の原発、どこで間違えたのか」を出した。朝日新聞出版刊。原発を取り巻く状況を多角的に取材・分析し、安全神話に警鐘を鳴らした。

【特集ページ】経済評論家　内橋克人を読む

共生の大地へ　没後１年・内橋克人の歩いた道

（７）周縁の条理　もう一つの日本は可能だ

2022.09.16

保存された渚滑線のレールと標識。内橋さんは地域再生に挑戦する住民たちの姿を追った（北海道滝上町提供）

各地を取材で訪れた内橋克人さん。「海や山を視界の隅にとらえながら、すでに始まっている未来を現実の中に探したい」と願った（提供）

北海道の北東の端、オホーツク海沿岸から渚滑川（しょこつがわ）に沿って奥に入る。滝上町（たきのうえちょう）。ここにかつてあった駅を保存した記念館がある。小さな駅舎、線路、駅名標識…。赤字ローカル線廃止対象として鉄路が消えてから約１０年後の１９９４（平成６）年、内橋克人さんが取材に訪れた。

鉄道を失った町は自立の道を選んだ。平成の大合併に抗（あらが）い、芝桜の名所として人を集め、赤い三角屋根の建物を配して「童話村」をテーマにまちづくりに取り組んだ。「都へと繋（つな）ぐ心の絆を失った同じ境遇の過疎地、中山間地、僻（へき）地、また地場産業を訪ね、荒い時代の風に立ち向かう人びとの悲嘆と勇気、逞（たくま）しい想像力、健気（けなげ）な日常の物語を紡いだ」。日本経済新聞で連載された「共生の大地」は注目を集め、岩波新書になった。滝上町のルポを収録した章を「『辺境と周縁』の条理」と名づけ、扉に廃線駅の写真を載せた。

■生きる・働く・暮らす

９５年の阪神・淡路大震災以降、論調に変化が出てくる。規制緩和に舵（かじ）を切った９０年代の長期不況の実態を見据えた後、市場原理一辺倒からの脱却の意義を

確信に満ちて唱えるようになった。著書が続いた。「浪費なき成長」「〈節度の経済学〉の時代」「もうひとつの日本は可能だ」「共生経済が始まる」…。当時、市場原理の対抗思潮として経済学者の宇沢弘文さんは社会的共通資本、宮本憲一さんは内発的発展、維持可能な社会を打ち出した。時を経て気候危機が差し迫った現代、斎藤幸平さんは資本主義に代わる道として「脱成長コミュニズム」を主張した。

そうした未来図を内橋さんはいち早く感知していた。私たちの社会には二つの日本がある－。市場原理を至上とする競争セクター。生きる・働く・暮らすの三つが地域で重なり合う共生セクター。周縁に目を凝らし、周縁に向かう。「一つの日本ともう一つの日本を分かつ断崖の裂け目はいよいよ地殻の奥底にまで達したように私には思われる」

■ＦＥＣ自給圏の形成

当時、ＮＨＫ番組「クローズアップ現代」のキャスターを務めた国谷裕子さんに刻まれているのがＦＥＣ（フェック）自給圏という構想だ。フーズ（食料・農業）、エネルギー、ケア（介護・コミュニティー）の三つを地域内で自給していく社会。「この三つは市場原理に委ねてはいけないんだ、市民が手放してはいけないんだということを四半世紀も前に言いだしておられた」

東日本大震災の起きた２０１１年の１０月１７日放送の「自給力～食とエネルギーを自給する暮らしの可能性」で新たな動きを示す映像の後、内橋さんは「これはノスタルジアではなく日本の未来を先取りした姿だ」と述べた。国谷さんは振り返る。

「ＦＥＣは基礎的な生存条件であり、そこにこだわることで地域に基幹産業も生み出せ、雇用機会も生まれ、尊厳ある労働につながる。必要なのが自覚的消費者だ。一人一人が、考える消費者になって『買う』という行為で地域を支えよう。内橋さんが繰り返して伝えてくれたメッセージだ」（加藤正文）

【ＦＥＣ自給圏の形成】フーズ、エネルギー、ケアの頭文字を合わせた。内橋克人さんが提唱した自給自足圏を基礎にした経済社会。「浪費なき成長」（２０００年、光文社）などに詳しい。「共生の大地」（１９９５年、岩波新書）、「同時代への発言６　周縁の条理」（９９年、岩波書店）は地域再生の胎動を描く。

【特集ページ】経済評論家　内橋克人を読む

共生の大地へ　没後１年・内橋克人の歩いた道

（８）「人間復興」の経済を目指して　「頂点同調主義」の危うさ

2022.09.21

神戸空襲の体験を語る内橋克人さん。「頂点同調主義にからめとられた私たち日本人の弱さ。再びその兆候が色濃く突出してきた」＝２００５年８月、神戸市中央区

未明の大空襲で建物が焼け落ち煙がくすぶる中を行き交う市民ら＝１９４５（昭和２０）年３月１７日、国鉄元町駅から西を望む

２００５（平成１７）年８月２０日午後。郵政解散に打って出た小泉純一郎首相（当時）が神戸・元町を遊説に訪れ、大観衆を前に演説した。同じころ内橋克人さんは近くのホールで語りかけていた。「今、満員のこの会場こそ声なき人々の声、力なき人々の力で満たされている」。神戸大空襲を語る会での講演だった。

その６０年前の３月１７日。大空襲で神戸の西半分が焼かれた。死者２６００人以上。当時１２歳の内橋さんはその前日、虫垂炎を発症し入院した。本来座るはずだった自宅裏の防空壕（ごう）の席に母親代わりのような女性が座った。そこに焼夷（しょうい）弾が直撃し、壕は崩れた。父が掘り返した。「身を少し傾け、泥にまみれ、眠ったように座っていた。打たれた肩の形は崩れ、赤黒いものが左半身をべったりと覆っていた」（「荒野渺茫（びょうぼう）」）。身代わりによって自分の生がある。終生、胸に抱き続けた。

■権論と民論

作家・城山三郎さん

「改革なくして成長なし」「自民党をぶっ壊す」…。小泉流政治に国民は喝采を送り、時代の流れが大きく渦巻いた。これを時の政権、権力、支配層の利害を代弁する「権論」と呼んだ内橋さんは市井の「民論」の立場から批判した。「『官から民へ』というが、その民の中に市民、国民は入っているのか。民とは民間巨大資本のことではないか」

権論によって増幅される時代の流れ。異を唱えるものは排除される。「戦争前、扇動に乗せられた国民は熱狂し、『鬼畜米英を撃て』と叫び、街なかを行進した」。少年の目に刻まれた光景。権威、権力に弱く、自ら上に合わせていく。そうした日本人の心性を哲学者久野収さんは「頂点同調主義」と呼んだ。危うさを知る内橋さんは繰り返した。「私たちの社会は戦前戦後変わっていない」。強いものに弱く、弱い者には強い。なぜノーと言えないのか。「私はここにこそ大きなテーマをみている」

■城山三郎さんとの対話

敬愛し、対話を重ねたのが５歳年上の作家城山三郎さん（１９２７～２００７年）だった。少年兵に志願した海軍で徹底的に個を押しつぶされた。組織のために虐げられる個人。戦後社会も個が置き去りにされる。組織と個人をテーマに経済小説の新境地を切り開いた。自由な個を脅かす風潮と対峙（たいじ）し、晩年には個人情報保護法の制定時に「言論弾圧につながる」と反対の論陣を張った。「戦争で日本が得られたものは憲法だけだ」が持論だった。

内橋さんは城山作品を読み解き、戦争と国家と並ぶ重要な柱として経済恐慌に注目した。昭和恐慌から開戦に至った道筋を踏まえ、バブル崩壊後の９０年代不況がなぜ平成恐慌に至る手前で防ぐことができたのか。「戦争放棄の憲法９条、生存権の２５条が歯止めになった」と言うと城山さんは返した。「全く同感だ」

２人は雑誌「論座」の企画で３回にわたって対談した。大失業時代、敗者復活のある社会、昭和恐慌と平成恐慌－をテーマに語り合い、対談集「『人間復興』の経済を目指して」を出した。

（加藤正文）

【「人間復興」の経済を目指して】城山三郎さん、内橋克人さんの対談集。２００２年、朝日新聞社。ほかに２人の対談は「失われた志」（文春文庫、００年）にも収められている。内橋さんの戦争体験は自伝的小説「荒野渺茫（びょうぼう）」（岩波書店、１３年）に詳しい。

【特集ページ】経済評論家　内橋克人を読む

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道 ⑧

「人間復興」の経済を目指して

「頂点同調主義」の危うさ

2005（平成17）年8月20日午後。郵政解散に打って出た小泉純一郎首相（当時）が神戸・元町を遊説に訪れ、大観衆を前に強調した。「同じころ内橋克人さん（55）のホールで聞いかけていた。『今、満員のこの会場』まだなき人々の声、力なき人々の力が満たされている」。神戸大空襲を命令会での講演だった。

その50年前の3月11日。大空襲で神戸の西部が焼かれた。死者7600人以上。当時12歳の内橋さんはその前日、東京大空襲を経験した。本来座るはずだった見学席の防空壕の中に母親と入れ代わりの幼い女性が座っていた。そこに焼夷弾が直撃し、壕は崩れた。父が救出した。「母を少し横切り、泥に埋まれ、眠ったように座っていた。打ち抜かれた胸の穴は崩れ、赤黒いものが生身をべったりと覆っていた」（『荒野渺茫』）。母親の生命が終焉、時代に投げ捨てた。

■権論と民論

「改革なしで成長なし」「自民党をぶっ壊す」…。小泉政治に国民は関心を寄せ、時代の流れが大きく揺さぶられる。「権論」と「民論」の対立。「官から民へ」というが、その民の中に市民、国民は入っているのか。民と官は問題大資本のことではないか。

権論によって増幅される時代の流れ。異を唱えるものは排除される。「戦争前、同調に逆らえない国民は熱狂し『聖戦』を『撃て』と叫び、街なかを行進した」。少年の日に刻まれた光景。権論、権力に抗う。自らと向かわせていく。そこに日本人の心性を指摘する野坂さんは「頂点同調主義」と呼んだ。「なぜ」を知る内橋さんは鋭く問うた。「私たちの社会は取り戻せるのか。強いものに弱く、弱い者には強い。なぜ？と問えないのか。『私は』ここにこそ大きなテーマがある」

■城山三郎さんとの対話

敗戦し、対談を重ねたのが5年上の作家城山三郎さん（1927～2007年）だった。少年兵に志願した海軍で能動的に命令しつづけられた、組織のために捧げられる個人、戦後社会も個人を置き去りにされる、組織と個人をテーマに経済小説の新境地を切り開いた。自由主義を脅かす風潮と対峙し、晩年には「情報保護法」の制定時に「言論弾圧につながる」と反対の論陣を張った。「戦争で日本が負けたのは事実だけだ」が持論だった。

内橋さんは城山作品を読み解き、歴史と国家と社会を重視する柱とした。経済学に注目した。昭和恐慌から満州に至った道筋を踏まえ、バブル崩壊後の90年代に沈黙が続き平成恐慌に至る中で問うことが出てきたのか。「戦争放棄の憲法9条、生存権の25条が歯止めになった」と言うと城山さんは返した。「全く同感だ」

2人は雑誌「論座」の企画で3回にわたって対談した。大失業時代、敗者復活のある社会、昭和恐慌と平成恐慌－をテーマに語り合い、対談集「『人間復興』の経済を目指して」を出した。（加藤正文）

◇次回は23日に掲載します。

作家 城山三郎さん

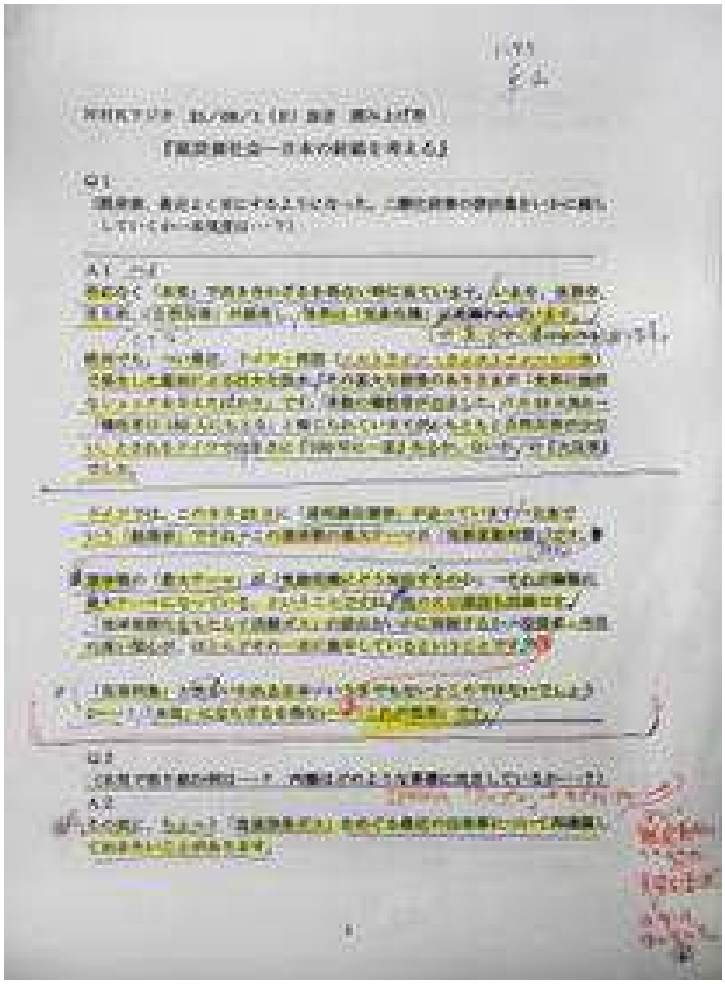
「人間復興」の経済を目指して　城山三郎さん、内橋克人さんの対談集。2002年、朝日新聞社。ほかに2人の対談は「失われた志」（文春文庫、00年）に収められている。内橋さんの戦争体験は自伝的小説「荒野渺茫（びょうぼう）」（岩波書店、13年）に詳しい。

神戸新聞2022.9.21.朝刊より

（９）民主主義をあきらめない　状況に強い危機感最期まで

2022.09.23

若き日の内橋克人さん。神戸新聞記者時代にたたき込まれた「記者三訓」を胸に取材に飛び回り、数々の著書を出した（提供）



神戸市須磨区で生まれ育った内橋克人さんは海が好きだった。約３０年暮らし、終（つい）の棲家（すみか）となった神奈川県鎌倉市の自宅。海が見たくなると由比ケ浜海岸まで歩いた。

その鎌倉で作家井上ひさしさん、精神科医なだいなださんと連名で呼びかけ人となり、２００５（平成１７）年に「鎌倉・九条の会」ができた。その後、１０年に井上さん、１３年、なださんが亡くなった。発足１０年を記念した１５年５月の会で内橋さんは話した。「大切なお二人の姿はすでになく、悲しく、寂しく、私は立ちすくむ思いでここにいます」

差し迫る時代状況に危機感が強まっていた。当時の安倍晋三首相は集団的自衛権行使を容認する安全保障関連法の成立へ躍起になり、反対論を押し切る形で１４年７月、憲法９条の解釈変更を閣議決定し、１５年９月に成立させた。国会周辺には「戦争法案、絶対反対」のコールが響いた。「一本一本の花を引き抜く、そういう時代がこの日本社会にもやってくるかもしれない。けれども、どんなに強い権力をもってしても、やってくる春

書斎の机上に置かれた最後のラジオ出演の原稿。番組のファンは多く、亡くなった後は３回にわたってアンコール放送があった＝神奈川県鎌倉市

講演する内橋克人さん。晩年、兵庫で話すとひときわ熱い思いがこもった＝２０１８年１１月、姫路市

を止めることはできない」。講演はブックレット「民主主義をあきらめない」に収録された。

■最後まで発言

２１年７月２日、８９歳になった。体調がすぐれず、月末、心臓が苦しくなったが、病院に行かず横になって過ごした。８月１日朝、ＮＨＫラジオ「マイあさ！」に出演した。柔らかで本質を突くラジオでの経済評論は人気で長年続いていた。この日のテーマは「脱炭素社会－日本の針路を考える」。質問と回答を書いたシナリオに、聞き取りやすいように区切りの記号も入れ、強調すべき箇所はひときわ濃く蛍光ペンを引いた。気候変動に伴い世界各地で自然災害が頻発している状況から説き起こし、温室効果ガスの削減に触れ、とりわけ「石炭火力」の問題に鋭くメスを入れた。

１９８２（昭和５７）年に原発を取材し「原発への警鐘」を刊行。エネルギーを取り巻く政官財の問題に精通していた。「日本では口では『脱炭素』を唱えながら実際には例えば『効率的な火力発電へシフト』などと平気で口にする識者が大手を振っているありさまです」と書かれたシナリオにペンで書き足した。「石炭火力をどう見直していくか。今朝のテーマもそれに尽きると思います」

放送３日後の８月４日、急性心筋梗塞で救急搬送され、入院。９月１日、息を引き取った。最期まで書きたいという思いだったという。

◇　　◇

今年７月末、一周忌を前に内橋さんのお宅を訪ねたとき、書斎に向かう廊下の棚に封筒が立てかけてあるのに気付いた。表紙には自筆で「記者三訓　ジャーナリストの心構え」と書かれていた。１９５７年、神戸新聞で記者として歩き出したころ先輩からたたき込まれた鉄則だという。「必ず現場へ行き、自分の目で確かめろ」「上（権威や上司）を向い

て仕事をするな」「攻める側ではなく、攻められる側に最後まで踏みとどまれ」。この三訓を胸に戦後社会の険しい道を歩いた。首尾一貫した見事な人生だった。（加藤正文）

＝おわり＝

【民主主義をあきらめない】岩波ブックレット、２０１５年刊。鎌倉・九条の会で行った講演を収録した。同会は０５年発足。大江健三郎さん、内橋克人さんらの講演を収録した同ブックレット「取り返しのつかないものを、取り返すために」（１１年）もある。

【特集ページ】経済評論家　内橋克人を読む

常に現場に立ち、自分の眼で確かめ、権威におもねず、攻められる側に身を置く視点
「現場・人間主義」を貫いた巨星

内橋克人さん死去

人重視の経済に信念

評伝　市場原理主義に警鐘

内橋克人さん死去

89歳

評論家、共生経済提唱

追悼

神戸新聞

2022年9月5日

共生の大地へ

没後1年

内橋克人の歩いた道

共生の大地へ　没後１年・内橋克人の歩いた道

９月１日で没後１年になる。戒名は「志峯院厳岳良克居士」。高い志を胸に厳しい峯（みね）を目指した生涯。神戸を起点に戦後社会の渺茫（びょうぼう）たる荒野を歩き、共生への希望を説き続けた一人のジャーナリストの軌跡を言葉と作品でつづる。

- （１）荒野渺茫（びょうぼう）　筆一本、真っすぐに生きた　2022/09/01
- （２）匠の時代　地域と響く「実の技術」　2022/09/02
- （３）規制緩和という悪夢　経済学の在り方を問う　2022/09/03
- （４）大震災復興への警鐘　欠けていた「都市政策」　2022/09/07
- （５）９０年代不況の帰結　働く者の尊厳見据えて　2022/09/09
- （６）原発への警鐘　「帰らざる河」渡った末に　2022/09/14
- （７）周縁の条理　もう一つの日本は可能だ　2022/09/16
- （８）「人間復興」の経済を目指して　「頂点同調主義」の危うさ　2022/09/21
- （９）民主主義をあきらめない　状況に強い危機感最期まで　2022/09/23

神戸新聞
2022年（令和4年）
9月23日
金曜日
神戸新聞社
〒650-8571
神戸市中央区東川崎町1-5-7
電話（078）362局
報道部 7040　文化部 7044
経済部 7094　販売局 7066
運動部 7095　事業局 7086
映像写真部 7047　メディアビジネス局 7081
読者本部お客さまセンター
078-362-7056
月～金 10～17時（土日祝休み）

5色のヒガンバナ 競演

加古川・円照寺で見頃

5色のヒガンバナが同時に咲く境内＝加古川市志方町広尾、円照寺

色とりどり5色のヒガンバナが、加古川市志方町広尾の円照寺境内を彩っている。一般的な赤をはじめ、ピンク、オレンジ、白、黄の約千株が見頃を迎え、参拝者を楽しませている。

上月義宗住職（75）が約20年前に栽培を始め、珍しい品種をインターネットで購入するなどし、現在は約3千株が植えられている。中でもピンクの花は珍しく、関東から訪れる愛好家もいるそうだ。

開花後は気温により5～7日は持つという。小野市から訪れた生花店の販売員中野鈴子さんは「5色のヒガンバナは想像以上にきれい」と感激していた。

9月末まで観賞できるという。円照寺☎079・452・2067

（笠原次郎）

正平調

秋の彼岸はヒガンバナの開花と歩調を合わせてやってくる。先週、奥播磨を訪ね、田んぼの畦に咲き始めているのを見た。きょうは秋分の日だから、今が満開だろう◆曼珠沙華の別名があり、古来不吉なイメージもつきまとってきた。多年性の球根植物で、球根にリコリンという毒を含む。そのせいでモグラやネズミを遠ざけるから、昔の人が農作物の害獣対策に活用した。田んぼの畦でよく見かけるのはそのためだ◆お墓の周りに多いのも、土葬の時代に小動物の侵入を防ぐ知恵だった。鮮やかで妖しい朱色の花が並ぶと、あの世とこの世を隔てる赤い道のようでもある◆コロナ禍が生んだサービスは多いが、「オンライン墓参り」にはさすがのご先祖さまも驚いただろう。高齢の親と会うのを心配した人が、代行業者のネット中継を通じてお参りするという。墓の清掃もしてくれるそうで、ありがたいには違いない◆わが実家では、喜寿を過ぎた母親を交え「墓じまい」の話題も出るようになった。生まれ育った町と働き暮らす町が遠く離れた人には切実な問題だ。これでいいのかと皆が自問しながら、先祖供養の在り方も変わり始めている◆〈人間の道はここまで曼珠沙華〉星野早苗。深まる秋の始まりに彼岸と此岸の境を考える。　2022・9・23

和鉄の道・Iron Road

経済評論家　内橋克人氏の評論他　関連資料掲載記事リスト

2022.9.1.内橋克人氏没後1年　By Mutsu Nakanishi

2021年10月　From Kobe より

「経済評論家　内橋克人氏　逝去」の訃報に接して 懐い出すままに

https://infokkkna.com/ironroad/2021htm/2021mutsu/fkobeR0310.pdf

内橋克人さん死去

人重視の経済に信念

［評伝］市場原理主義に警鐘

内橋克人さん死去

89歳

評論家、共生経済提唱

追悼

神戸新聞
2021年9月5日
日曜日

和鉄の道・Iron Road
経済評論家　内橋克人氏の評論他　関連資料掲載記事リスト
2022.9.1.内橋克人氏没後１年　By Mutsu Nakanishi

■**2021.9.5.　内橋克人氏逝去追悼記事**　内橋克人氏主要業績紹介
■**2012.1.1.　年の初め　内橋克人氏の１００年後へのメッセージ**

ホームページ「和鉄の道・Iron Road - from Kobe」に掲載紹介してきた内橋克人氏の記事リスト

◎和鉄の道・Iron Road　－2012 年の初めにより
内橋克人氏「100 年後へのメッセージ」
https://infokkkna.com/ironroad/2012htm/walk9/2012nengakobe.pdf

◎和鉄の道・Iron Road　From Kobe 2012 年１月
厳しさを力に　経済評論家　内橋克人氏１００年インタビューに共感して　by Mutsu Nakanishi
https://infokkkna.com/ironroad/2012htm/2012mutsu/fkobe1201.pdf
参考添付　内橋克人 NHK BS 2011.12.18. 放送「内橋克人　１００年インタビュー」視聴メモ

◎和鉄の道・Iron Road　From Kobe 2013 年８月より
あまりに多い「想定外・経験したことがない」の風潮
NHK 朝一番 ビジネス展望 内橋克人氏の解説を紹介
創造性の欠如した今の時代に異常気象にだまし絵をダブらせ今一番自分 にすっと入る
https://infokkkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsu/fkobe1308.pdf

◎和鉄の道・Iron Road　From Kobe 2013 年９月より
新書 藻谷浩介・NHK広島取材班「里山資本主義-日本経済は『安心の原理』で動く-」の紹介
今 日本で一番求められている地域を元気にする
日本再生への道「里山資本主義 & 内橋克人氏の提案する地域自立自給経済圏」創設の実践
https://infokkkna.com/ironroad/2013htm/2013mutsu/fkobe1309.pdf

◎和鉄の道・Iron Road　From Kobe 2018年12月より
日本の行く先がおもいやられる師走　数が頼りの薄っぺらな社会からの脱出へ 若者たちへの思いが募る
こんな思いを代弁して、神戸新聞 内橋克人氏ほかの評論にも
https://www.infokkkna.com/ironroad/2018htm/2018mutsu/fkobe1812uchihashi.pdf

戦後　日本が歩んだ道　NHK　BS　2011. 12. 18.「内橋克人 100 年インタビュー」より

■ 戦争時代の反省　戦中・戦後　そして　今も続く社会構成の原点　日本人気質
- 頂点同調主義
- 熱狂的な等質化現象　リーダーにゆだねる・異を排する

■ 1960 年代　高度経済成長　頂点同調主義・等質化の中で謳歌した高度成長
- 技術革新・技術力による生産量と質の著しい向上
- 公害ほかの矛盾に蓋をした成長

・生産効率・物づくりに特化した改善技術の開発　独創性のなさが弱点
・基礎技術・革新技術開発の遅れ
世界一の技術立国日本の謳歌　⇔　異を唱えられぬ日本の社会

■ 1970 年代後半　石油ショックによる原油価格の急騰　「狂乱物価」とインフレ・構造不況へ突入
1974　第一次石油ショック・中東戦争　・成長産業が素材産業から加工組立て産業へシフト
1979　第二次石油ショック・イラン革命　・厳しい国際競争にさらされる

■ 1985 年～2008 年　バブル経済とその終焉　不況克服のための規制緩和と大型金融改革の時代
1986～　バブル景気　マネー資本主義の時代へ
アメリカ型資本主義　株価至上主義
1991　バブルの崩壊

■ 1990 年代～　不況克服へ　規制緩和と企業国際化の急速展開
2001　エンロンの破たん
2000　～　雇用不安など社会問題急拡大　企業の国際化急展開
非正規雇用　外国人投資の急上昇

グローバル化　市場原理主義経済
効率化・国際競争力
金融のビッグバン強欲資本主義へ
グローバル化の名のもとアメリカ中心の枠組に日本が飲み込まれてゆく

■ 2011 年　東日本大震災・原発事故　そして年金問題と破綻寸前の国家財政　急激な円高　政治の貧困
日本経済の疲弊と格差拡大　企業の海外移転の急拡大
舵取りのなき日本に先行きが見えず　社会全体に広がる閉塞感・不安感

もうひとつの経済学「理念型経済学　-市場主語から国民主語の経済-」の提唱

矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済　　これらの自立・自給がないと　国際マネーの餌食となる

トリクルダウン効果の枠組み今完全に崩れ去っており、国際競争力・市場主義を盾に企業・金融優遇の政策の中で　国民の閉塞感と不安感はぬぐえない。
国際企業・金融依存から脱し、特に　現日本の社会の自己矛盾を生んできた源　食糧・エネルギー・高齢化〔介護・医療〕の分野で自立してゆく以外に、新しい日本構築の道はない。

- 自給自立型農業の構築
「ゆず」栽培から加工で30億円規模に成長した高知県馬路村
- 自給率数パーセントが市民共同発電など自然・再生可能エネルギーで自給率200パーセントを達成したデンマーク
- 介護・医療は今やビジネス構築の必要な先端産業

「理念型経済学　-市場主語から国民主語の経済-」の構築の実現は可能

矛盾を解決することで、成長を生むことで「マネー資本主義に対抗する経済

これらの自立・自給がないと　国際マネーの餌食となる

- 頂点問題から脱して声をあげよう
- 賢さを伴った勇気を

市場主語から国民主語の経済構築へ

7月16日早朝　NHKラジオ朝一番　ビジネス展望

『働き方の多様化とは何か』内橋克人　　2013.7.16.

内橋克人さんのビジネス解説　実に明快分かりやすい解説に

私には一番すっと入ってくる話になるほどと。

◎　多様な働き方・雇用・労働の多様化「働き方の多様化」と「働かせ方の多様化」は違う

◎　正社員として働くのは「権利」であって、様々な働き方は働く個人それぞれの都合の「選択」だ。

「日本ではこれが、ごっちゃにされて　都合よく使われて、今の厳しい社会状況を生んでいる。

同じように働いても、正社員と非正社員では、単に賃金格差にとどまらず、

雇用保険や福利厚生の手厚さの違いなど全般的な格差は極めて大きい。

正社員以外の働き方が増える事をもって『働き方の多様化』とするような考え方が、

いかに働く人の現実から遠い議論かが、改めて分かるであろう。」と。

内橋克人氏は「『職無くば人間の尊厳もない』働くとはすなわち、人間がどう生きるのかという問題である」と説き、

「国際競争力をつけるようなグローバル　スタンダードが

非正規雇用を増やすことだとの錯覚を日本では植えつけられているが、

けっしてそんなことはない　」

と欧米の具体的な事例をひいて言う。

◎　例えば、『オランダモデル』。の例示

同一労働同一賃金を前提にし、労働時間の長短による差別をなくして、賃金は均等割り。

均等待遇の上に立った長時間労働を正社員と、短時間労働制社員の２種類しか労働は存在しない。

2018. 11. 29. 神戸新聞（1・2面掲載）

「針路21」欄 内橋克人氏評論 整理転載

「安倍外交」の実相 針路21

国を危うくする言い繕い

目立つ内外の食い違い

内橋 克人

「安倍外交」の実相 針路21

もう一つの日本は可能だ

共生の大地へ

没後1年・内橋克人の歩いた道

働く者の尊厳見据えて

戦後　日本が歩んだ道 NHK BS 2011.12.18.「内橋克人 100年インタビュー」より

- ■ 戦争時代の反省　戦中・戦後　そして　今も続く社会構成の原点　日本人気質
  - ● 頂点同調主義
  - ● 熱狂的な等質化現象　リーダーにゆだねる・異を排する
- ■ 1960年代　高度経済成長　頂点同調主義・等質化の中で謳歌した高度成長
  - ● 技術革新・技術力による生産量と質の著しい向上
  - ● 公害ほかの矛盾に蓋をした成長
  - ・生産効率・物づくりに特化した改善技術の開発　独創性のなさが弱点
  - ・基礎技術・革新技術開発の遅れ
  - 世界一の技術立国日本の謳歌　⇔　異を唱えられぬ日本の社会
- ■ 1970年代後半　石油ショックによる原油価格の急騰　「狂乱物価」とインフレ・構造不況へ突入
  - 1974　第一次石油ショック・中東戦争　・成長産業が素材産業から加工組立て産業へシフト
  - 1979　第二次石油ショック・イラン革命　・厳しい国際競争にさらされる
- ■ 1985年～2008年　バブル経済とその崩壊　不況克服のための規制緩和と大型金融改革の時代
  - 1986～　バブル景気　マネー資本主義の時代へ
  - アメリカ型資本主義　株価至上主義
  - 1991　バブルの崩壊
- ■ 1990年代～　不況克服へ　規制緩和と企業国際化の急速展開
  - 2001　エンロンの破たん
  - 2000　～　雇用不安など社会問題急拡大　企業の国際化急展開
  - 非正規雇用　外国人投資の急上昇
- ■ 2011年　東日本大震災・原発事故　そして年金問題と破綻寸前の国家財政　急激な円高　政治の貧困
  - 日本経済の疲弊と格差拡大　企業の海外移転の急拡大
  - 舵取りのなき日本に先行きが見えず　社会全体に広がる閉塞感・不安感

グローバル化　市場原理主義経済
効率化・国際競争力
金融のビッグバン強欲資本主義へ
グローバル化の名のもとアメリカ中心の枠組に日本が飲み込まれてゆく

7月16日早朝　NHKラジオ朝一番　ビジネス展望

『働き方の多様化とは何か』内橋克人　2013.7.10.

内橋克人さんのビジネス解説　実に明快分かりやすい解説に
私には一言すっと入ってくる話になるほどと。

◎ 多様な働き方・雇用・労働の多様化「働き方の多様化」と「働かせ方の多様化」は違う

◎ 正社員として働くのは「権利」であって、様々な働き方は働く個人それぞれの都合の「選択」だ。

「日本ではこれが、ごっちゃにされて　都合よく使われて、今の厳しい社会状況を生んでいる。
同じように働いても、正社員と非正社員では、単に賃金格差にとどまらず、
雇用保険や福利厚生の手厚さの違いなど全般的な格差は極めて大きい。
正社員以外の働き方が増える事をもって『働き方の多様化』とするような考え方が、
いかに働く人の現実から遠い議論かが、改めて分かるであろう。」と。

内橋克人氏は「『職無くば人間の尊厳もない』働くとはすなわち、人間がどう生きるのかという問題である」と説き、
「国際競争力をつけるようなグローバル　スタンダードが
非正規雇用を増やすことだとの錯覚を日本では植えつけられているが、
けっしてそんなことはない　」
と欧米の具体的な事例をひいて言う。

◎ 例えば、『オランダモデル』の例示
同一労働同一賃金を前提にし、労働時間の長短による差別をなくして、賃金は均等割り。
均等待遇の上に立った長時間労働を正社員と、短時間労働制社員の2種類しか労働は存在しない。

【参考】■【2021年10月 From Kobe】内橋克人さん逝去に想いをつのらせて 想いだすままに
常に現場に立ち、自分の眼で確かめ、権威におもねず、攻められる側に身を置く視点
「現場・人間主義」を貫いた巨星　by Mutsu Nakanishi

添付「和鉄の道- from Kobe」に掲載紹介してきた 内橋克人氏の記事リスト
https://infokkkna.com/ironroad/2021htm/2021mutsu/fkobeR0310.pdf